
【聖騎士団物語第三部】

フリル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【聖騎士団物語第三部】

【Nコード】

N8435I

【作者名】

フリル

【あらすじ】

ゲノム王国再建より二年：平和な日々が続き、フリル達聖騎士団はそんな穏やかな日々を満喫していた。しかし、大陸に新たな脅威が襲いかかる。

襲撃者には魔王との戦いでフリルの良き理解者となった風帝龍フレグニール！？

聖騎士団はまたしても戦いの大きな流れの中に飲み込まれていく…

【太古の災厄】（前書き）

ゲノム王国再建より二年…平和な日々が続き、フリル達聖騎士団はそんな穏やかな日々を満喫していた。しかし、大陸に新たな脅威が襲いかかる。

襲撃者には魔王との戦いでフリルの良き理解者となった風帝龍フレグニール！？

聖騎士団はまたしても戦いの大きな流れの中に飲み込まれていく…

【太古の災厄】

ゲノム王国新設から2年が過ぎ、13歳になったフリルは一人で日々大きくなる国の中にいた。

「ふあ…」

フリルは退屈のあまり欠伸する。アグネシアを統一し、戦争などなくなり都会とも魔界とも和睦を結んだゲノム王国に、最早敵と呼べるものは存在しなくなっていた。何故フリルが一人で王国に残っているのか…フリルは3日前に聖騎士団のメンバーに二週間以上の休暇を与え、故郷帰りをさせたのである。

「平和っていうのも、案外退屈ね…」

フリルは国の端にある魔物達が作った自然公園に来ていた。自然公園というよりは大きな森であるのだが、特に気にする訳も無くベンチに腰掛け、都会から送られてきた子供向けの雑誌を取り出す。

「全く…あたしは子供じゃ、ないつつうの…」

フリルは苦笑しながら、送り主である兄、アル・フロルを思う、アルはフリルを一人ゲノム王国に残すのにまだ心配しており、外交の理由と言って週に一度フリルに会いにやってくる、今日も丁度その日でありアルはエリオールと会談中である。

フリルは肩にかかる長い髪を片手で払いのけ、ため息を吐きながら渋々雑誌を読んでいる。すると目の前に数人の男女がやってきた。フリルは顔を上げる。男女は四人、背の小さな子供、朱色の髪がトサカのように立ち上がった筋肉質の男、金髪の綺麗な少女、そして

以前顔を合わせた事のある豊かなバストの女性。四人の特徴はみんな両耳が尖っており、眼は黄金に輝いていた。

「…フレグニール様？」

フリルは本を閉じようとする。するとトサカの男が動く、瞬きよりも早いスピードでフリルの顔面目がけて拳を放つ。

「わあ！」

フリルはとっさに衝撃を纏わせた雑誌を男の手に投げつけ男の手を頭上に弾き、勢い殺せずに殴りかかる男の腹部に立ち上がり踏み込みながらの衝撃纏わせた左ブローを放ち、前にあった木に男をぶっ飛ばす。男は木に背中をぶつけるが、直ぐに受け身をとって立ち上がる。

「いきなり何すんのよ！」

フリルが声を張り上げると、同時に背後からの殺気に身を低くする。

【シュバアー！】——フリルの頭上を通り過ぎる風の弾丸。

「この！」

フリルは背中に衝撃を纏い、背後のフレグニールに向かって背中をぶつける。ドーンと爆発のような轟音とともにフレグニールの体は飛んでいき、その隙に両サイドから金髪の少女の飛び蹴り、小さな子供の足払いが迫る。

「く！」

フリルは金髪の少女の足を掴みながら飛び上がり少女を子供に向かって投げつける。しかし今度はその背中に衝撃が響く。

「かは！」

フリルの背中にトサカの男のタックルが直撃しており、フリルはたまらず肺から息を吐き出して地面に落ちる。

「っ！」

フリルは地面に叩きつけられる前に体をひねり、着地。しかし今度は間髪いれずにその頬をフレグニールの空中回し蹴りで蹴り飛ばされる。

「あっ！…きゃああっ！」

蹴り飛ばされて上体をのけぞらせた体制のまま、蹴りと共に生じた風でフリルの体は木に向かって飛ばされ。背中を木に叩きつけられる。

【ドオン！】

「ふ…え…」

フリルは口から少量の血を吐き出す、そこに休む暇もなく小さな子供が腹部に飛び蹴りを突き入れる。

「あ…あ…」

そのとび蹴りは子供とは思えない程の破壊力がこめられており、フリルは口から大量の血を吐き出して膝を折る。

『龍の神子の魂と肉を…主人に捧げる…』

虚ろな口調でフレグニールがフリルに近づいて羽交い締めにする。

「!?!?!?!?!」

突如まきおこる稲妻のような激痛にフリルは声を失い空を仰ぐ、次にトサカの男がフリルの顔に手を触れる。

「!?!?!?!?!」

想像もつかない激痛で全身を痙攣させ、足をばたつかせると目の前が真っ暗になる。その両足に何かがしがみつくとたんに耳と鼻に感覚が消え、フリルは意識を失った。フレグニールはグッタリとするフリルを地面に倒し、フリルを見下ろす。

『回収した…後は肉…』

四人は同時に舌なめずりすると歯を剥き出しにし、フリルを囲んでしゃがみ込む。

『ガアアアアア!?!?!』

同時に巨大な毛むくじらかな手がフリルを喰おうとしていたフレグニール達をまとめて吹き飛ばす。

『ウオオオオオン!?!?!』

乱入したのは青銀に輝く巨大な狼、ゼリムだった。ゼリムはフリルの上で咆哮を挙げ受け身を取らせる隙すら与えず口から真っ赤な破壊の光を放ち、フレグニール達の体をその光で飲みこんでいく。

『…』

四人は形は残るものの重傷を負い、地面に落ちる。ゼリムは間髪いれずに二発目を放とうと光を口の中に溜める。

『フレグニール！』

トサカの男が叫ぶ。

『撤退！』

子供が身体をはねあげフレグニールは首を横に振る。

『魂と肉を一緒に持っていかなければ！…』

『今は部が悪い…目的を忘れるな』

金髪の少女は飛び上がり、フレグニールは子供を抱えて飛んでいき、空高くで巨大な三匹の龍に姿を変える。

『…帝龍…だと…』

逃げていく帝龍を見送り、ゼリムは人間に戻り足元のフリルに歩み寄る。

『……』

フリルは目を見開いたまま倒れたまま動かない。心音はあるが死んでいるかのように静かだった。ゼリムはフリルの瞼を閉じてやると、フリルをおぶり、城に向かって走っていった。

「フリル…」

フリルはベッド寝かされたまま…アルはその脇に座っている。

「怪我は治しました…ですが…」

マリアはいい辛そうに表情を歪ませる。

「教えてくれ…」

アルはフリルに目を向けたまま、呻くようにそう呟く。

「視覚、聴覚、嗅覚、そして声が無くなっています…」

そこに腕を組んでいたゼリムが付け足す。

『奴ら、魂と肉がどうか言っていた…多分フリルの魂を四分割して奪ったのだろうか…』

アルそこまで聞くと立ち上がる。

「なら…魂を奪った帝龍を殺せば…フリルはいつも通りのフリルに

戻るんだな？」

ゼリムは目をまん丸にする。

『殺す！？まさか貴様…』

アルは眠るフリルを見下ろす。

「フリル一人を帝龍なんて名前の奴らが四人がかりで袋だたきにしやがって…可愛い妹をこんなにしやがって…俺は許さねえ…」

アルはゼリムの肩を掴む。

「居場所を教えろ…」

ゼリムはアルの手を取る。

『帝龍を殺せば世界は滅ぶ…殺してはだめだ…』

ゼリムは優しく語るようにアルの頭を撫でる。

『殺さないなら、教えてやる…』

アルは何となく照れてしまいがら頷く。

『では…』

アルは戦艦ブリッジにいた、彼は何処までも冷酷な目線でモニターを眺めている。

「正気かよ…」

それを眺めていたロン毛のチャライ格好をしたシャークは隣の帽子にウエスタンスタイルの少年キッドに耳打ちする。

「妹のフリル様？…なんでも身体と思考以外全部奪われたんだってさ…君だって大切な妹がそうになったら何とかするだろ？」

キッドは腕を組み何度も頷く。

「成る程…そりゃあハッピーじゃねえな…」

と、その時…

「目標発見！前方500m、竜の森、目視可能です！」

部下からの報告を聞いてアルは立ち上がる。

「ハンマーホエール、熱核焼夷弾頭用意…龍の森だかなんだかを焼き払う…腐れ爬虫類野郎を穴蔵から引きずり出せ！！」

ハンマーホエールの低部ハッチが開き、大きな筒が現れると、筒に火が着いて谷の中に飛んでいく。

【カツ…！！！！】—まばゆい閃光と膨大な爆発が谷全体を包み、祠のあるであろう場所を谷もろとも蒸発させ、炎が緑を焼き払う。しかしアルは容赦しない。

「第二射！」

アルが叫ぶが、焼き払われた場所から一匹の龍が天に昇るのを見つけた。

「出てきたな…」

アルは歯を剥き出しにしてニヤリと笑い、龍の頭上に待機していた大量のVX78が龍の体にミサイルと弾丸を雨のように浴びせ、帝龍フレグニールは程なく地面に叩きつけられる。

「よし…全機さげろ、キッド、シャーク…行くぜ？」

アルはジャージを脱ぎ捨てながら歩いていく。

「シャーク…」

キッドは目を丸くして首を向ける。

「僕たち必要あるの？」

キッドに言われてシャークは首を横に振る。

『な…なんじゃと…いうのじゃ…』

フレグニールは龍の姿から人間に戻ると、ちまみれの身体を起こし。跡形もなく消し飛んだ祠を見る。

『人間…』

フレグニールは歯を噛みしめギリギリならす。

「いたいた…」

フレグニールが振り向くと、そこには一人の男…アル・フロルが立っていた。

『貴様…の仕業か…』

フレグニールは怒りで目を黄金に輝かせる。

『許さん！…ゆるさんっ…』

【ドオオン！！】—フレグニールが言葉を言えたのはそこまでで、稲妻のようなアルの蹴がフレグニールの顔面をぶっ飛ばしていた。

「こっちのセリフだ…トカゲ野郎…」

アルの放つ一切手加減のない一撃は、フレグニールを軽々とぶっ飛ばす。

『ぎゅ…』

フレグニールは今まで感じた事のない痛みに目を見開く。しかし既にフレグニールの反応速度を遥かに凌駕したアルの拳がフレグニールの顔に降り注ぎ、地面に叩きつける。

【ズガン！！ズガズガズガズガズガ…】—情け容赦ないアルの拳の弾膜の一発一発ごとにフレグニールの体が地面にめり込ん

フレグニールは激痛と恐怖で表情を歪める。

「フリルからとったもん…返せや」

アルは千切れかけた足をグリグリと踏みつけて踏みちぎらんとする。

『ぎぎ！ぎぎあああ！！』

フレグニールの断末魔、アルは汚いものでも見るかのように見下ろし。

『わかつ…わかつた！……わかつたあ！！…』

手から光の球体が生まれ、それは空に消える。

「まず一つか…」

アルはため息を吐いて背を向ける。

『ま！待っ…つのじゃ…』

フレグニールは残った右腕だけで這ってアルの足を掴む。アルは振り返り見下ろす。

『死にとおない…頼む…わしも…』

「フリルを殺そうとした奴が良く言うぜ…」

アルは殺そうと足を上げる。

『仕方ないのじゃ!!…あやつを捧げなきや世界が滅ぶのじゃ!!』

アルはピタリと動きを止める。

『【無能皇帝】…奴…が…』

フレグニールはそこで意識を失った。

「ち…仕方ねえな…」

アルはフレグニールを抱き上げ、ハンマーホエールに向かい。ハンマーホエールはゲノムへと向かう。

「よ…マリアいるかい？」

城へ帰って来たアルはマリアを呼びつけ。

「フレグニール様…」

目を点にしてアルの抱えるフレグニールを見る。

「ちょっと痛み付け過ぎた、直せるか？」

「な！治しますよ！！」

マリアは慌ててフレグニールを抱え、開き部屋に行きアルは一先ずフリルの部屋に向かった。

『よ！、フリルの聴覚が戻ったみたいだぞ？』

フリルは上半身だけを起こしてボーツとしていた。その脇でゼリムはお見舞いの品らしき果物をモグモグしていた。

「それフリルんだろうが…」

アルはジト目になる。

『わたしは貴様が留守の間フリルの面倒を見ていたのだぞ？、なあフリル？』

フリルはこくりと頷く。

「ならいいか…」

アルはそのままフリルのベッドに腰掛ける。

「なあゼリム、フレグニールが言ってたんだが【無能皇帝】ってなんだ？」

ゼリムはパイナップルに伸ばそうとしていた手を止める。

『無能皇帝…だと？』

ゼリムは驚いた様子で顔を背ける。

『わたしが知っているのはアグネシアに古くから伝わる災厄だというだけだな…何でもわたしの先代が産まれるより前の話だからなあ…』

思いつけるようにパイナップルを抱えてモグモグしはじめた。

「んじゃ…あと三匹、ぶん殴ってこないとわかんないわな…」

アルはブーツとしているフリルの手を取る。

「お兄ちゃん、お前の仇…とってやっからな？」

するとフリルの口がゆっくり動く、声は出ない。しかし口の形で『行かないで』と言っている事がアルにはわかった…アルは隣でパイナップルを食べてベタベタな手をペロペロ舐めているゼリムに目を向ける。

「フリルの面倒、任せたぜ？」

ゼリムは手をペロペロなめながら。

『都会に子供達をつれていきたいな』

ゼリムはそう言ってからナプキンで手を拭き、アルはフリルから手を離すと立ち上がる。

「!!」

フリルは起き上がり、自分も行こうとする。しかしゼリムはそれを抑えて制止し、ベッドに張り倒すと上からのしかかり身動きを封じる。

「考えておく…」

アルはそのまま外に出て、再び来た道に戻り、ハンマーホエールの進路を今度は龍の山へと向かわせる。

『お嬢様…』

ゼリムの耳にエデンの声が響く。ゼリムはフリルに馬乗りになって押さえ付けた姿勢でいた。

『お嬢様…』

『なんだ！いまわたしは忙しい！』

ゼリムは空に向かって怒鳴る。

『それが…ミリお嬢様が…』

ゼリムはフリルから降りて背を向ける。

『ミリが？』

『お嬢様に会いたいと暴れていまして…われわれではどうも…屋敷におもどりください』

エデンの懇願にゼリムはため息を吐く。

『レオンは？』

『レオン坊っちゃまでしたら寝室に…』

ゼリムは息を吸い込む。

『バカモノ!! レオンがいるなら問題ないではないか!! もう切るぞ!!』

ゼリムは念視通話を切り、振り返る。既にそこにはフリルはいなかった。開け放たれた窓から飛び降りたようで、武器も無くなっていた。

『あいつ!…あんな状態で…』

ゼリムは窓から飛び降り後を追いつけるのであった

【盲目の少女】（前書き）

風帝龍フレグニールを打ち破ったアル・フロル。帝龍さえもおびえさせる無能皇帝とは一体…そして聴力が戻ったとはいえ残る五感を封じられても戦う意思を曲げないフリル…

残る帝龍達、アルやゼリム、そしてフリル…3者の思惑はさらなる脅威へと向かって加速していく……

【盲目の少女】

ゼリムの隙をついて脱走してからフリルは聴覚のみを頼りに、ゲノム王国の城下町を壁伝いに歩いていった。水の音がする方へ向かう事で匂いを拡散してゼリムの鋭敏な嗅覚に対抗し、追跡しにくくしていた。しかし、いくらフリルでも聴覚だけでの移動は困難だった―普通の人間であればよけようと思わずとも無意識にかわしてしまう程度の道のちよつとした段差につまづくき、派手に転ぶ。

「…！」

身体を強く地面に打ち付け、まだ癒えていない傷から襲いかかる激痛にフリルは無言でのたうち回る。唯一部屋を出る時に手探りで掴んだ武器：槍を支えに程なくして立ち上がると、それを杖のように着いて僅かに感じる風の音を頼りに吹いてくる方向へと進む。フリルは東門を目指していた。

「ちよつと君、大丈夫かい？」

鎧の音をガチャガチャならしてよって来る兵士、しかしフリルは言葉を話せない。フリルが兵士の立てる音で方角がわからなくなり足を止めてしまっていると、兵士が心配そうにフリルの肩を叩く。

「…」

フリルは振り向かずに行こうとするも、兵士はフリルを無理やり振り向かせる。

「うひょー」

フリルを見た兵士は思わず見とれてしまう。

(さっさと離さないよバカ…)

フリルはそう思いながら相手の手を弾き、槍を杖にして前に進む。
兵士は其処で悪巧みを考えた。

「いって…：今のは公務妨害だな…：」

兵士はわざとらしく言いながら、再びフリルの肩を掴んで振り向かせる…が、そこはフリル、すかさず足を振り上げて兵士の股間を蹴りあげる。

【ズン！】——一瞬のうちに全身を駆け巡る激痛に、兵士は白目をむいて失神する。

「おい！！貴様！！」

「何があった？」

「なにか怪しい奴でもいたのか？」

場所が不味かったのか、仲間の兵士がワラワラと駆け寄ってくる。
しかし…

「まで！お前ら！！…その方は…」

一人の兵士が声をあげる。フリルが声の方を振り向くと、声をあげた兵士は急にかしこまる。

「し！失礼しました！」

兵士はそれだけ言うと、慌てて同僚達にフリルの名を告げれば他のものも慌ててかしこまりって職務に戻り、何もなかったかの様に静かになる。

フリルはそれを見無視し、一人背を向け、風の音で東門に向かって歩みを進めた：

その頃：アルはハンマーホエールで、ゼリムから得た情報を基に龍の山へと向かっていた。

「大統領、現行速度で後1分後に龍の山上空に差し掛かります」

「さて：どうすつか：」

アルは既に目視可能となった龍の山を眺めながら腕を組む。熱核焼夷弾は火山を活発化させる恐れがあり、使えない。さらに炎帝龍【グリーヴァ】の甲殻は数千℃にもおよび、触れるだけでも火傷を負うどころか茹ってしまう。

【ブーブー】—アルのポケットの携帯端末が震えて着信を知らせ、アルはそれをポケットから取り出すとスイッチを入れる。画面いっぱい覆いかぶさるようにゼリムの顔が表示されていた。

『すまん…フリルを逃がした…』

ゼリムは申し訳なさそうに声が低い。アルはそんなゼリムを慰めるように首を振りながら優しく話しかける。

「フリルは止めても帝龍討伐にいったさ…だから気にするな、それよりもゼリム？お願いがあるのだが…」

そして…十数分後、ゼリムは龍の山にいた。

『成る程？、わたしにグリーンヴァをぶっ飛ばせというのだな？』

ゼリムは端末を目の前に時折竜の山を見上げるように言っでは、ハンマーホール内のアルに向かってニヤリと笑いかける。

「いやか？」

アルの声にゼリムは首を横にする。

『いや？、魔族であるわたしが帝龍に戦いを挑むなんて傑作ではないか！わたしは愉快だぞ！…任せておけ、わたしは強いぞ…』

ゼリムはそれだけ言うとき軽いステップの後に四つんばいになり駆け出して、一気に山頂の祠を目指す。風よりも早く山を登り、ハンマーよりも力強く大地を踏みしめ、ひたすら進む。そしていつしか祠にたどり着くと、ゼリムはその祠に対して口をガパアッと開いて祠を噛み潰す。そして現れた巨大な穴蔵の中に。

『カアアアア！！！』

口に溜めた赤い破滅の光を放つ。【カァッ】と赤い閃光の後に穴蔵が爆発して吹き飛ぶ。

【ズオオオオン】―強大な轟音とともに地中から巨大な真っ赤な龍が飛び出してくると、ゼリムは本来の姿を解き放つ。

『ガア！ウオオオオオン！！！！』

『獣王ノ末裔カ：神喰ミトハ言ツタモノダ！』

巨大な帝龍と巨大な青銀の狼が向き合って睨み合い、双方一步も譲らない。数秒：緊迫したにらみ合いが続く。

『ギュオオオオオ！！！！』

先に動いたのはグリーヴァ、口をガパアと開けて巨大な火球をゼリムめがけて放つ。ゼリムも火球を放つ瞬間にはすでに動き始めていれば、瞬きよりも早く身軽に火球を避け、火球が地面に激突して爆散する前には既にグリーヴァの横を通る。

『！！？』

グリーヴァがそれを追い掛けようと振り向く：が、今度はゼリムが攻勢に転じる。全身を覆う銀色の美しい毛並みはまるで巨大な針のように鋭く、硬くなり、グリーヴァの顔面を突き刺して目を潰す。

『グオオオオオ！！！！』

グリーヴァが顔を仰け反らすと、ゼリムはその隙にグリーヴァの尻尾に噛み付き、鯨の様に鋭く鋭利な牙で尻尾を食い千切る。

『ギョオオオオオ!!!』

グリーヴァは稲妻に打たれたかの様に飛び上がる：が、ゼリムはグリーヴァを逃がさない。戦闘においてチャンスをつ掴んでもそのアドヴァンテージを生かきすることなく再び同じイーブンへと持ち込まれることは少なくない。しかし、ことゼリムに限ってそれはない。一旦飛び上がった体勢を整えようとするその身体を、ゼリムの横風ぎに振るわれた巨大な右腕が殴りつけると、地面に叩きつける。叩きつけられて悶えながらもグリーヴァは敵意をむき出しにして叫ぶ

『ヌアアアメルナアアア!!!』

『ガアアアアアア!!!』

灼熱の業火をグリーヴァが吐き出すと、ゼリムの口からは赤き破滅の光が同時に放たれ、ぶつかりあう力は中央で強大な爆発を巻き起こす。

『ギャアアアアアア!!!』

グリーヴァは翼を使って煙を吹き飛ばし、ゼリムの姿を発見するとそこに再び二発目の業火を放つ。

『オオオオオオオ!!!』

ゼリムはこのまま業火と閃光のぶつかり合いをしていても埒が明かないと見るや、火を恐れずに突き抜けながら人間の姿にもどり、右

手の爪を立てて振りかぶりながらグリーヴァに接近する。

『!?!?』

『【絶牙・双爪】!!!!』

完全に意表を突かれたグリーヴァは、飛び上がって振るわれた鋼の剣よりも鋭く鋭利な爪にその首を深々と切り裂かれ、血を吹き上げて逃げようとする。ゼリムはそのまま背に捕まって乗り、再び本来の姿になってグリーヴァを組み伏せる。そして、巨大な口を開いて今度は後ろから首筋に噛み付き、背中の甲殻を引きはがさんばかりに爪を立てる。

『ギヤアアアア!!!!』

身体をのた打ち回らせて暴れるも、既に首を絞められたに等しいグリーヴァに勝ち目は無かった。

「勝ったか…」

アルはハンマーホエルから二人を見下ろし、グリーヴァの頭が地面に崩れるのを確認する。同時に光の球体が天に登り、消えて行った。ゼリムは人間に戻り、尻尾に隠した携帯端末を取る。

「ゼリム、やったな」

アルには言われるがゼリムは首を横に振る。

『まだだぞアル・フロル!、この山には後一体…氷帝龍【ブリューナ】がいる、せっかくだから奴も倒すぞ!!!』

「わかった、グリーヴァを回収してから向かう。」

ゼリムは大きく頷き、走りだす。

東門を抜けて一人ヨロヨロと歩くフリルの鼻に異変が起こった。突然鼻に感覚が戻り、フリルは戸惑う。しかし直ぐに気付く。誰かが帝龍を倒した…。そして嗅覚と共に方向感覚が戻り、自身が歩いてきた時間…距離…逆算して今どこにいるのかを考えだす。しかし、フリルの鼻を土の発酵したような匂い…つい先日襲われたときに嗅いだ匂いで有ることに気がつく。距離を考えればここが龍の荒野であってでもいいのだが、そのためには東門から真直ぐに龍の荒野めがけて歩いていなくてはならなかった。フリルは己の幸運に感謝しつつもどこからか響く男の子の声に緊張を走らせる。

『龍ノ神子…』

その可愛らしい声とは不釣り合いに息遣いは大きく、とても大きな生物であることをうかがわせる。

『ミズカラ食ワレニキタノカー!!!』

土帝龍【アブソアジル】はその巨大な口を開けて大地もろともフリルを飲み込もうとする。しかしフリルは同時に構えを解き自ら飲み込まれる。

『【夢幻流奥義・無影】』

フリルは槍を構えアブソアジルの口のなかに秒間1200発の連続突きを放つ。

【ガガガガガガガガガガ】―アブソアジルの口のなかに巻き起こる壮絶な痛み。

『ギャアオオオオオ!!』

アブソアジルは顔を持ち上げ、フリルを吐き出す。フリルは空中で回転、足で空気を蹴ってアブソアジルの背に乗る。強固な堅殻を踏みつけ、大きく槍を振りかぶる。

【絶!滅!撃!!】―フリルは槍を堅殻に叩きつければ、核を思わせる衝撃が堅殻に亀裂を走らせ、アブソアジルは地面を転がりフリルを振り落とそうとする。フリルが地面に着地すると、アブソアジルは巨大な身体をぶつけようとして横に首を向け、勢いつけて身体を迫らせる。

【迫計・天掌】―アブソアジルの体に手を当てたフリルは衝撃を殺してアブソアジルを止める。

『!?!?!?!?』

アブソアジルの驚きはわからなくもない。1000メートルの巨体である彼の体当たりを、目が見えない身長1メートル前後の少女が片手で受けとめたのだから当たり前である。フリルは槍を背中に背負い、両手を野球ボールを握るような形にし。

【夢幻龍帝・牙】―両手を牙に見たて突き出すと、アブソアジルの

亀裂が入っていた堅殻を紙くずのように貫き肉を抉る。

【爪】―牙の状態から身体を回し、アブソアジルの体に爪で挟られたような切り傷を無数につける。

血を噴き上げるアブソアシルから一旦手をひき、背中の槍を取ると…

【尾】―空中で繰り出される槍の横風が、アブソアジルの巨大な身体を遠くへとぶっ飛ばす。

【ドオオオン】―巨大なアブソアシルは横殴りに地面に擦り土煙を上げながら飛んで行く。フリルは追撃しに走りだす。

『見つけたぞー!!』

龍の山氷山の一角、ゼリムはブリューナを見つけ本来の姿を解き放ち、のんきに寝息をたてていたブリューナの体に赤い破滅の光を放つ。

『キュオオオオオー!!!!』

ブリューナは赤い光に包まれて飛び起き、その顔面にゼリムの巨大な前足がめり込む。

【ドオン!】―激しい爆音を立ててブリューナは仰け反り身体を倒す。

『コレデ！！終ワリダアアアア！！！！』

口から真っ赤な破滅の光を放つ：しかしブリューナも帝龍、そのま
まやられはしない。素早く受け身を取り巨大な翼に氷を纏わせ体を
包むと赤い光を氷で乱反射させる。そして破滅の光を防ぎきって氷
がはじけ飛ぶと、砕けた氷がキラキラと輝かせて翼を広げ、口から
青い光を吐き出す。

【ピイイイー！！！！】——レーザーメスのような光が大地を切り裂
きながらゼリムに迫る。

『！！』

ゼリムは素早く身をかわすが数瞬遅く、毛を切られる。しかしゼリ
ムは怯まずに突き進み、人間に戻る。するとブリューナも人間に変
わり、両手が凍り付いて刀のようになる。

『はああああ』

『がああああ』

お互いに正面からの打ち合い。

【ガガガガガガガガガガガガ！！！！】——ゼリムが右の爪を横
風ぎに振るえば、ブリューナは左の氷剣で受け止める。ブリューナ
が右の氷剣をゼリムの胸に突き出せば、ゼリムは左手でそれを受け
止め、反転し、槍の様な尻尾をブリューナの腹に迫らせる。それを
かわすようにブリューナは大きく飛び上がり、ゼリムの脳天めがけ
て両手の氷剣を振り下ろす。ゼリムは両手の爪でそれらを受け、お
互いに一歩も譲らない。眼があったその時、同時に口をあけており…

『ガアアアアア！！』

『キュオオオオオ！！』

ゼリムの口から放たれた灼熱、ブリューナの口から放たれた絶対零度の吐息。お互いにぶつかりあい中間、至近距離で大爆発を起こす。

【ドーン】――しかしそれでも二人は引かない。ゼリムは爆風をかき分け一気に突っ込んで来る。とブリューナもわかつていたかのようにそれを迎え撃つ。

『ああああああ！！！！』

『ああああああ！！！！』

お互いに雄叫びをあげながら身体をぶつけ合う。お互いに衝撃を受けるもまだ引かない。

『【牙王・血閃爪】！！』

ゼリムは至近距離で右の爪を大きく振れば大きな斬撃波が真っ直ぐブリューナに迫る。

『【ダイヤモンド・ダスト】』

ブリューナは砕けた氷の粒子を再結晶させた氷の斬撃で斬撃を受け止め、飛び上がりながらゼリムの頭に右の氷剣を振り下ろす。ゼリムはそれを右の肘で受け止め左手を突き出せばその手の掌から先に槍の矛先がついた黒い鎖生み出して、鎖は真っ直ぐブリューナへと延

びる。ブリューナはそれを首を傾げて避ける、しかい黒い鎖は更に伸びてはるか後方へいく。ブリューナはそれを好機と思ったのか空中で再び右の氷剣を振るい。ゼリムはそれを右手で掴む。そしてニヤリと笑う。

『脇腹が空いたな？』

【ズン！】―ブリューナの右脇腹に自分の顔の横を通り過ぎたはずの鎖の先端についた槍の矛先が突き刺さり、体が浮く。

『終わりだな…【捕縛陣・暗鎖】』

ゼリムは瞬間移動を思わせる動きでブリューナのまわりをグルグル回り、ブリューナを黒い鎖でグルグルに巻く。

『【縛発】！！』

ゼリムの右手から伸びる鎖に黒色の光が伝わり、鎖にグルグル巻きにされたブリューナを中心に強大な魔力の爆発が巻き起こる…そして爆発がおさまると銀世界だった氷山は一瞬として焼け野原になっていた。ゼリムはその光景をみて勝利を確信していたが…しかし、

『！！！』

爆発の中から現れたのは氷の結晶。結晶には見る見るうちに亀裂が走り、中からブリューナが姿を現し、髪を巻き上げ幼い顔立ちを笑わせる。

『しぶとい奴だ…』

ゼリムは深々とため息を吐いた。

【ドーン！！】――龍の荒野では地震を思わせる振動が大地に伝わり、激しく大地を揺らしていた。

『アリエン！…』

巨大な身体をゴロゴロ転がされ、アブソアジルは動揺を隠しきれない。自分の足の指程しかない少女に、見事に押されていることが彼には理解できなかった。

【ズーン！】――フリルは目は見えない。しかし耳と鼻そして気配で相手のおおよその位置を掴むことは出来ていた。相手は大きく、鈍い。そしてワンパターンな行動ばかり…だからフリルとしては体格差はそのまま単なる的の大きさというアドバンテージになり、目がないことなどハンデにもなっていなかった。フリルは高々と飛び上がり相手の背中に乗ると、槍を振り回しては背中の堅殻を滅多うちにし、打たれた堅殻からは大量の血が吹き飛ぶ。

『ガアッアアアアアアア！！！！』

堅殻が割れてきて流石に激痛を感じたのか、アブソアジルは暴れるように悶え、のたうちまわり、地面を転がる。ただ、アブソアジルは激痛の中でも冷静にフリルの弱点を模索する。確かに普通の相手と戦うならばこの強大な姿はそのまま威嚇へとなり、パワーも魔力も飛躍的に跳ね上がるために動きの鈍さを差し引いても戦闘力も倍増する。しかし…ではなぜ今このように苦戦しているのか…それ

はフリルが目が見えない為に強大な姿は威嚇となることなく、レイブンの総量で自分を上回っているフリルを相手にするならば魔力とパワーが上がったところでそこは五分五分：そうすると的の大きさとスピードの点で劣り、フリルは適当に手を突き出せば動きの鈍い自分をめちやくちやに殴れるのに対して自分は拘束で動き回る蜂を的確に撃ち抜かなくてはいけない：そこまで考えて思い当たる。ならどうしたらいいか：やはりフリルの弱点は目が見えていないこと：今ならば姿を人型に戻してパワーと魔力を犠牲にしても気配を薄くしてスピードを増せば視力のない今なら圧倒できるのではないのだろうか：と。

『オオオオオ！！！！』

アブソアジルは背中中のフリルを吹き飛ばし、咆哮を挙げて人間の姿に戻り、走りだす。

「!？」

フリルは目が見えない。そのため急に気配が薄れた事に動揺する。

【ドゴオ！】――背後から突き抜ける衝撃、アブソアジルは小さな身体をフリルの背中にぶつけていた。フリルは無言で飛んでいき、地面を転がり、内臓から上がってくる血液を吐き出しながら立ち上がる。

【ドン！】――起き上がりざまに顎を蹴りあげられ、フリルの意識が揺らぐ。

『大人しくしていればいいものお！！』

アブソアジルはフリルを掴み、止めを刺そうと口を開け、その首に噛りつこうと迫る。

【ガブウツ！】―その瞬間…幼い少女の血飛沫が散った。

その頃…龍の山

【ドーン！】―ゼリムはブリューナにより窮地に立たされていた。

『ぐあっ！…う』

ゼリムの身体はブリューナの降り積もらせた冷たい雪の中に投げ出されうつ伏せに転がる。

『犬は犬らしく…しておればいいものお…』

水蒸気の煙の中から現れるブリューナ、水蒸気は一瞬で水の結晶に変わる。

『【ダイヤモンドダスト】』

ブリューナは地面に倒れるゼリムに手を翳せば、周囲を漂っていた無数の氷の粒子が刃の雨となって輝きながらゼリムに迫る。

『ちー！』

ゼリムは両腕を金属のように硬く硬化させて顔を庇う、しかし無数

の氷の結晶は容赦なくゼリムの身体を切り刻み、鮮血が散る。

『つ…うう…』

ゼリムは耳を垂らしてその場にゆっくり膝をつき、ブリューナは勝利を確信して歩み寄る。

『あっけない…フェンリルの末裔が聞いて呆れるではないか…』

ブリューナはゼリムの前に立ち、ゼリムの頭に手を掲げる。

『最後に言い残す言葉は？』

ブリューナの言葉にゼリムは歯を剥き出しにして笑う。

『…く…くく』

突然笑い始めるゼリムにブリューナは怪訝な表情で魔力を手に入める。

『貴様！！バカか！！？』

言うが早いかゼリムはガバアっと口を開き、瞬きよりも早くブリューナの魔力を込めた手に噛み付き、その腕を噛みちぎる。

『ぎ！！！！やあああああ！！？』

けたたましいブリューナの悲鳴、しかしゼリムはそんな猶予は与えない。

『!?!?』

『友を待たせているのでな…悪く思ふな』

【ドゴオオッ!?!】―ゼリムの渾身の右ストレートがブリューナの左頬を打ち抜き殴り飛ばし、ブリューナは回転しながら地面に叩きつけられ、ゴロゴロ転がって止まり動かなくなる。その身体から光の球が空へと昇り…

『フリル…死ぬなよ?』

ゼリムはそう呟いて溜息をつく。

【ガブウツ】―フリルは咄嗟に肩をアブソアジルの口に入れ、噛ませて首を護っていた。

【ブチィ!?!】―アブソアジルはフリルの肩の肉を食い千切り、フリルから離れる。フリルの肩からは大量の血が吹き出し、余りの激痛と血を失う脱力感でフリルは遂に膝をつき、右手で傷口を押さええるも流れる血液は止まらない。

『勝ち目は薄くなった?』

アブソアジルは見えないであろうと踏んだフリルの正面でニコヤかに微笑む。そして手に魔力を纏わせて大地の色をした剣を作り、フリルに向ける。

『終わりだ…さよなら!!』

フリルに向かって音も匂いもなく真っ直ぐに忍び寄り、その胸に手を伸ばす。

【ガシイ】

『……!』

アブソアジルは驚きで目を見開かく。目の前でフリルはその目を黄金に輝かせてアブソアジルを睨んでいたからである。

『ば!…ばか…な!』

フリルは構えを解いた。

『そんな!!…!!…!!ばかなー!!…!!』

アブソアジルの絶叫、その全身を一秒間12000発の急所突きが五秒間にわたり貫き、最後に全身のレイブンを右手に集中させた一撃をアブソアジルの顔面に放つ。

『……!!』

アブソアジルは驚きの表情で飛んでいき、地面へと落ちるとそのままピクリとも動かなくなる。そして体から抜け出た光球がフリルの体にもぐりこむと、ついにフリルは五感すべてと声を取り戻す…

「か…は…は」

しかし、フリルも程なくして地面に崩れる。肩から流れる血液が大地に吸収され、意識が薄れていく。

「あたし…死んじゃう…の？」

フリルはなんとかして生きようと思えるが、最早策はなかった。次第に寒さが身体を駆け抜け、急激な眠気がフリルを襲う。

「…お…にい…」

フリルは瞳に涙を一滴だけ溜めて閉じ、そのまま意識は闇の中に消えさった。

その頃、龍の山でも悲劇は起ころうとしていた。

『…?』

「どうした？ゼリム」

ブリューナを回収する作業中、ゼリムは防寒具をアルから貰ってヌクヌクしていたが、急にビクンと毛を逆立てて空を見上げる。アルは不思議そうにゼリムを見つめ、視線の方をさぐる。

「ゼリム？」

ゼリムは耳を動かしてはアルに背を向け、歩きだす。

「おいゼリム？」

『アル・フロル』

ゼリムは防寒具を脱いでアルに押し付け、裸になる。

『今すぐ逃げろ…いいな』

ゼリムはそれだけ言い残すと目にもとまらぬ早さで走っていく。

「ゼリム?…」

アルも突き刺さるような殺気とゼリムの尋常でない雰囲気を感じ、殺気の流れてくる源…ゼリムの向かった方向めがけて走り出す。

『……』

暫く走ったゼリムの目の前に、人間の形をしたソレが現れた。ソレは人間の姿をしていた…だが、男でも女でもなく、歯を剥き出しにして口を頬まで引き裂いて笑い、真っ赤に輝く瞳、信じられない程に白いアルビノの肌をして…。

『ギャハハハハハハ!!!!』

ソレはゼリムを見るなり五つの声が重なったような声でばか笑いつる。

『貴様…何物だ?…』

ゼリムは全身の毛が逆立つのを覚え、そして脅えている事をしる。

(わたしが…脅えている?)

『よく?なに脅えてんだあ!!?、なあに?恐いのに我々の前に立っちゃったわけえ!!?』

ソレはニヤニヤとゼリムを見つめ、涎を垂らして真っ赤な双眼を光らせる。

『!?!』

くる!…と思った次の瞬間、ゼリムの身体は地面に叩きつけられていた。

『うんまそーな肉!!ギャハハハハハハ』

ソレはゼリムの右腕を掴み。

『ぎ!うああああああっ!!!!』

右腕をブチブチとひきちぎり、そしてむしゃむしゃと食い始める。

『う…ぐ…う!!』

右腕を失ったゼリムは左腕で何とか立ち上がろうとする、しかし立ち上がれない。ゼリムは両足を見ると、その両足は既になかった。

『うわああああ!!』

ゼリムは激痛に悲鳴を上げる、ソレはゼリムの両足をむしゃむしゃ食い尽くし、そしてゼリムに多いかぶさる。

『ひ!…ひい!!』

『いただきまーすっ!!』

ソレはゼリムの腹を食いつき、生きたまま腹の肉を食い千切る。

『ひぎいああああ!!』

ゼリムは声に成らない悲鳴を上げてのたうち回る、しかしソレはゼリムなどお構い無しに食事を続け遂に食い破ると腸を引きずりだしむしゃむしゃと口を動かす。

『うぎっ…ぎっ…』

ゼリムは白目を剥きながら痙攣してうめき声を漏らす。

『やべえー!うめえし不死身だから再生するし最高ー!!当分餌にはこまんねえよ!!ギャハハハハハハ!!』

ソレは高々と笑い、ゼリムの乳房に食らい付き、引きちぎる。その度にゼリムの身体は魚のように跳ね回り、意識が薄れていくのがわかった。そしてソレはゼリムの肉を食いながら、胸に輝くそれに目を向ける。

『お?邪魔なペンダントだなあ』

ソレはゼリムの血に汚れた手をそれに伸ばす。

『触る…な』

ゼリムの意識とは無関係に左手が動き、延ばしていた手を掴み、歯をむき出しにして威嚇する。

『はあ？』

ソレはゼリムの左手を払いのけ、ペンダントをつかむ。

『お前、立場わかってる？ 餌にそんな価値があるとおもうわけえ？』

そしてペンダントを契ろうと、力を加えていくゼリムは痛み等忘れていた。

『やめ…ろ』

その時一陣の風がゼリムの頬を撫でた。

【ドッゴオオオ】―ソレの顔面を何かの足が蹴とばし、ソレは信じられないスピードで吹っ飛ばされる。

『ぎ！…いってえ！…いってえぞ！…』

ソレは起き上がろうとする、しかし身体を荒れた海のような気持ち悪さが襲い、立つことができない。

『なんだこりゃ！ ギャハハハハハハハおもしれえ！…おもしれえ』

よ！！！！？　いってえギャハハハハハハ！！！！！！』

ソレはそんなばか笑いをしながらのたうちまわっていた。

『あ……る』

ゼリムはかろうじて残る意識で自分を抱えるアルを見つける。

「死にそうか？」

アルは走りながら聞き、ゼリムは口から血の泡を吐きながら首を横に振る。

「無理しねえで寝てろ、再生に回せ……おめえがいなくなったらアレの対処が更に面倒になる……」

ゼリムは小さく頷くと、瞼を閉じた。

【目覚めたら…】（前書き）

アブゾアジルとの激戦の最中…ついに声以外のすべてを取り戻したフリルはアブゾアジルを打倒してすべてを取り戻す…しかし、激戦で失った傷は深く、フリルは意識を失った…

時を同じくしてアルとゼリムも太古の災厄との対峙をする…ゼリムは深い傷を負って意識を失っていた…

意識を失った二人の未来は目覚めた時にどうなっているのか…

【目覚めたら…】

アブゾアジルとの戦いの終盤、意識を失う直前…フリルは死を確信していた。しかし突然鬱陶しい程に眩い陽射しがフリルの瞼を照らして意識を引き戻す。

「ん…」

フリルが目を覚ますと、木造の天井があった。訝しげにあたりを見回すと目の前にあったドアが開き

「やあ…起きたかい？」

見知らぬ男が入ってきた。

「あなた…は？」

フリルは重い身体を起こそうとする。

「あ！まって！！」

男がフリルの身体を支えようとするも既に遅く、フリルの全身にアブゾアジルに食いちぎられた肩の傷が生み出す痛みが稲妻のように駆け抜ける。

「つう！！」

フリルは肩を押さえてベッドに倒れ、男はフリルの脇にくるとフリルの手を退かす。

「全く…まだ傷口が完全にふさがって無いんだぞ?…」

男はフリルの肩から血が滲むのを見ると救急箱を取り、慣れた手付きで包帯を準備する。

「…包帯、変えるけどいいかい?」

男がフリルの顔を覗くと、フリルは小さく頷く。ようやく事態を認識し始めると自分の服ではないことに気付く。

「脱がした?…」

フリルに聞かれ、一瞬戸惑う男だったが素直に頷く。

「でないと君は死んでいたよ?、だいたい僕は子供には欲情しないから安心したまえ!はっはっ…」

その顔をフリルの左の鉄拳が殴り飛ばし、男はぐるぐると回転しながら扉をぶちやぶって外の壁に激突する。

「た、助けた…のに…ぐふっ」

男の身体は緩やかに崩れた。

「はあ…」

フリルは自分で包帯を手に取り、肩に巻かれた包帯を解いていった。

「…?」

フリルは包帯を解いてみると、ある不自然な事態に気が付く。肩の傷は痛みはするものの、大分小さくなっていたのだ。そして再び床でのびている男を見ると、男はフリルと同じように左肩に包帯を巻いていた。

「なんで?…」

フリルは痛む体を引きずるようにやつとのことのでベッドから起き上がり、脇に寄せてあった自分の荷物から携帯を取り出して日付を確認する。

「…2日も寝てたんだ…」

そしてフリルの携帯には兄からのメールが100通以上たまっていた。

「送りすぎ…」

フリルは苦笑しながらも、一先ずアルに電話をかけることにした。

【プププ…プルッガチャ】

『フリル!!!!』

呼びベル僅か一回でアルが出て大声で叫び、フリルは受話器を耳から放す。

「うっさい…」

『うるさいじゃない！何処にいるんだ！…心配ばっかかけさせやがって！！』

そしてフリルは窓の外を見る。

「…何処だろ…」

窓辺に立って空を眺める…フリルは急に身体がズシンと重くなるのを感じた。

「ん…」

キリキリと締め付けるような頭痛に頭を押さえ、フリルはフラフラとベッドに倒れ込む。携帯を持っていた右手に力は入らず、携帯は手から滑り落ち、全身を寒気が襲う。

「わあ！…大丈夫かい！？」

男が意識を取り戻し、うつ伏せだったフリルを仰向けに寝かしてくれる。

「…貧血ね…」

フリルは真っ白くなった顔で男を見上げる。

「…あれだけ出血してたら…当たり前といったらそうだね…待って、食べ物を持って来るよ」

男はそう言って、部屋から慌てて出ていく。どうやら二階建の家らしく、バタバタと騒がしく降りる音が耳に響く。

「おかしな人…」

男は殴り飛ばされたにも関わらず笑っていた…フリルはそんな事を考えながら、瞼を閉じた。

次にフリルが目を覚ますと辺りは既に真っ暗だった。

「ごめん！、材料が無くて買いに行ってたよ」

男はランプを片手に料理を載せたトレイを持って来る。

「ん…ありがとう」

フリルは男を目で追い掛ける。男は机に料理を置き、机ごとフリルのベッド脇に持ってくる。料理はフリルが苦手な麺類だった…透き通るスープに浸かったスパゲティはランプの光を受けてキラキラと光る。さらにもう一皿、目玉焼きの乗った一口大に切られたステーキ肉があり、フリルは男に目を向ける。男はニコニコしながらフリルの額に手を当てる。

「熱はないかな、自分で食べれるかい？」

フリルは返事をする代わりに上半身を起こして机に身体を向けるとフォークとスプーンを手取る。

「っ！」

しかし左手に力を込めると痛みが走りフォークを机に落としてしま
う。

「うーん、スパゲティは失敗だったね」

男はそう言ってフリルの隣に座ると、フォークを手に肉を突き刺し
てフリルの口元に持っていく。

「？」

「いや、食べさせてあげるから口開けて？」

フリルは渋々口を開け、知らない男に肉を食べさせて貰う。肉は硬
く筋が多いため、とても病人の為にだす料理ではない。何だか恥ず
かしくなり赤くなってしまふフリルだったが、男はさも当たり前だ
というように、フリルを介護する。

「あ…口の周り拭いてあげるよ」

「え？、あっ…だ、大じょっ…んむっ」

男はナプキンをフリルの唇に押しあて、口元の汚れを拭いとる。フ
リルは深々とため息をつきながら右手でフォークを取りスパゲティ
を食べる…薄塩味のスパゲティは麺類が苦手なフリルでも普通に食
べる事が出来た。

「ご馳走さま…」

フリルは食事を終えると、男は食器を重ねる。

「そうだ…トイレは部屋を出て右にあるから、遠慮なく使ってくれ…立てなかったら僕を起こしてくれたら連れていくからさ」

フリルは制止する。

「連れていくって…同じ部屋に寝る気？」

男はニヤリと笑い指を立てる。

「もう二日も共にした仲じゃない」

自分が寝ている間、彼が世話をしていたと思うと恥ずかしくて死にたくなるフリルだった。あまりの恥ずかしさにプルプルと震えてしまう。

「大丈夫？」

男はフリルを覗きこむ。

「大丈夫！スッゴク恥ずかしいだけよっ…」

二日も寝ていて身体が臭くないのも彼が拭いてくれていたからなのだろう、そう考えるだけで恥ずかしかった。

「…今日は自分で拭くかい？」

「当たり前よ!!」

フリルはそうさけぶも肩が痛む。

「うーん…恥ずかしいのはわかるけど、今日も僕が拭いてあげるよ…君の傷、凄く痛いし」

男はそんな事をいいながら食器を持って外に出ていき、湯気の昇る洗面器を持って来る。そのまま男は嫌がるフリルの布団をめくり、服をひんむいて裸にし、包帯を解く。

「うう…」

裸を見られる恥ずかしさにフリルは泣きそうになるが、彼はフリルを見て辛そうな顔をする。

「随分傷が目立つね…」

フリルの身体はそこらじゅうに傷があった。男は労るようにフリルの身体を丁寧に拭きはじめ、汚れを綺麗に拭う。

「痛むかい？」

フリルの肩の傷口を見て、真っ赤になっているフリルに目を向ける。

「はい、俯せになって」

フリルをゴロンと転がして俯せにして背中を拭いてやり、一通り綺麗に拭うと手慣れた手付きで新しい消毒液に浸したガーゼを肩の傷口にはって包帯を巻き、替えの服を着せる。

「はい！、完了」

男はそう言うと、洗面器を持って部屋から出ていった。

「…恥ずかしい…」

フリルは真っ赤になって寝返りをうち、一人悶えていた。暫くして男が戻ってくる。男はフリルの脇の机に椅子を寄せ、

「さて、まず君の名前を聞きたいな…」

男は興味深そうにフリルに笑いかけ、フリルは渋々と

「フリル・フロル」

と呟くと、急に男の顔から笑みが消える。

「フリル!?!…て!魔王を倒した!?!?!…」

フリルは驚き顔の男に向かってやや不可解そうに頷く。

「そ!?!そんな!?!フリル・フロルは戦場を駆け抜ける美しき一輪の華!月よりも美しい美貌を持つて…」

フリルは目を棒にする。

「どこのバカがそんな噂流したのよ…」

男は更に顔を寄せる。

「じゃ!じゃあ!その伝説の君がなんであんなところで?…」

フリルは頬をかきながら目を背ける。

「アブソアジルって龍と戦ってたの」

男は口をあんぐりあける。

「戦ってた？……土帝龍と？」

フリルは頷く。

「ええ、視力と言葉が戻ってるということはあたしは勝ったみたいね…」

「…奇跡だぞ…君…しかし伝説のフリルが…こんなおちびだなんて…俺はもつとナイスバディだと思ったのに…」

フリルはため息混じりに苦笑する。

「あんたは？」

フリルが切り出すと男は顔を上げる。

「あんたの名前よ」

フリルは男に顔を向ける。男は、ああ、と一息いれると背もたれに体重を乗せ。

「俺は、ソリテュード・ワイス。長いからみんなはソロンって呼んでる」

ソロンは自慢気に胸を張るが、フリルは無視する。

「じゃあまず、ここは何処？」

「龍の荒野の東にある街さ、名前なんてない」

フリルの問いにソロンは淡々と答える。

「そ、じゃああなたの左肩の包帯は？」

フリルに聞かれ、ソロンは少し顔をしかめる。

「…これは言えないね」

フリルは首を傾げるつつ再び横になる。

「じゃ、ここ3日間の宿代は？」

ソロンは首を横に振る。

「それなら気にしないでいいよ、僕が勝手に助けたんだからさ」

ソロンはそう言いながら机を脇によせフリルに接近するとその顔を見つめる。

「なによ…」

フリルは鬱陶しそうにソロンに顔を向ける。

「確かに…こうしてみると君、可愛いね…」

「なに？、殴って下さいって？」

フリルは手で拳を作る。

「いやいやいやいや！、待って待って…」

「飛び掛かって来たら殺すからね？」

フリルはそうして、寝返りを打つと瞼を閉じる。

「そりゃ…きつい」

そういつて苦笑するとソロンも目を閉じた…。

「んー…ん」

暫くして、深夜の真っ只中ソロンは呻き声に目を覚ました。

「ん…ンツ…ウツ」

声の主はフリルだった。フリルは無意識にその小さな身体を両腕で抱えて涙を流して震えていた。

「う…うつ…ふえ…」

彼女は夜になると決まってうなされる…何故なのかは知らないが、それは恐怖によるものだと思察することが出来る。

「どうしたものか…」

ソロンはフリルを見下ろして彼女の頭を撫でる。フリルは何かに脅えていて、その姿は痛々しかった。

「殴られるかな…でも…」

朝…フリルは不自然な、しかし懐かしく、何処か落ち着く暖かさに目を覚ました。眼を開くとフリルの目の前でソロンが自分を抱き締めて寝息を立てていた。

「……【掌波】…」

フリルは両手にレイブンを込め、そして…。

「【烈破撃】！！」

「ぎゃあああああ！！」

朝…一軒の家から男の悲鳴が挙がった。

「まあ…あたしも人間だから？、命の恩人を殺す事はしないわよ？」
フリルはベッドの上で足を組み目の前に正座しているソロンを見下ろす。ソロンは青アザだらけの顔を挙げ、

「……………」

黙ったまま俯く。

「理由はあるんでしょう？」

フリルは足を解き身を乗り出してジッと見つめる。ソロンは少し戸惑うような仕草の後。

「…泣いてる君をみてたら…ついね…」

フリルは言われて首を傾げる。

「泣く？…あたしが？」

ソロンは頷く。

「君は毎晩、眠りにつくたびに泣きながらうなされている…よっぱど怖い夢をみるんだね…君は」

怖い…と言われ、フリルは俯く。このソロンという男は夜を恐れるフリルを支えてくれた訳であり、フリルにやましい思いを抱く訳でもなかった。

「殴って…悪かったわ…」

フリルはそう言って立ち上がる。

「フリル？」

ソロンはフリルを見上げ、フリルはソロンを見下ろす。

「久々に身体を動かしたいわ…どっか広いところない？」

フリルは大分痛みの引いた左肩を回し、軽い屈伸運動を始める。

「運動って…大丈夫なのかい？」

ソロンは心配そうにし、フリルは首を横に振る。

「うーん…大分身体が重いしレイブンが安定しない…30%程度の力しか出せてないよ？」

正直フリルは立つ事すらやっとだった、しかしフリルは構わずにそう答えた。

「それじゃあ…」

心配そうなソロンにフリルは笑みを溢す。

「大丈夫よ」

フリルは自分の荷物の中から槍を取出す。

「眠ってなんかいられないわよ…」

フリルは鋭い眼差しで窓の外を睨んだ。

「大丈夫か？」

ハンマーホエールの医務室、ゼリムのベッドの脇でアルはゼリムに話し掛ける。

『ん…』

ゼリムはすっかり弱り果て、耳を垂れて息を漏らす。ゼリムは前回の戦闘での傷が酷く、右腕と両足、内臓の82%を食われている。そのためゼリムの再生力をもってしても、まだ30%程度の回復しかしていないのが現状である。

『アル…』

ゼリムは苦しそうにアルの名前を呼び、アルはゼリムの手を握ってやる。

「ここだ…」

ゼリムは瞼を開いてアルを見つめる。

『すまん…』

ゼリムが苦しそうに謝罪すると、アルはゼリムの手を強く握る。

「バカ…お前がいなかったら回収作業をしていた奴らが皆やられてたかもしれねえんだぞ？…お前は寧ろ誇るべきさ…」

アルはゼリムの頭を撫で、ゼリムは小さく頷く。

「しかし…ありゃなんだ？」

アルは蹴った足を引きずって椅子に腰掛ける。

『わからん…』

ゼリムは首を横に振る。

『あれは…』

隣で声があがり、アルはそちらに顔を向ける。そこでは銀髪に黄金の眼の女性が上体を起こしてこちらを見ていた…風帝龍【フレグニール】である。

『災厄さ』

フレグニールは哀しげな表情で自分の手を見おろす。

「災厄？」

アルは首を傾げる。するとそこに一人の技官が飛び込んで来る。

「大統領！！」

技官の顔は蒼白になっている。

「どうした？」

「りゅ！…龍姫の園が！」

それを聞くとアルは慌てて医務室の窓から外を見る。遠くの大地から漆黒の煙が天へと昇り空を汚していた。

「……あいつか」

アルの目に闘志の炎が宿る。

【ドーン!!】

大地を揺さ振る衝撃と轟音に龍姫の園を仕切る少女、レナスはテラスから身を乗り出す。

「なんだこれは…」

レナスは正門に大穴が空いているのを確認した。

「姫様!!」

慌てて飛び込んでくる桃色のツインテールに小学生のような体格の少女…リリムの声にレナスは振り返る。

「リリム教官、これは一体？」

レナスはリリムに聞こうと歩み寄る。しかしリリムが口を開く前にその背後から長い髪の少女が慌てて入ってきて叫ぶ。その少女はまるで人形のような印象をうけ、その外見はどことなくレナスに似て

いた。

「災厄です！、姉様」

少女はレナスを姉と呼んだ。

「なに？…ファリス、それは本当なのですか？」

レナスは自身の妹であるファリス・T・ハーベストを見て声を張る。
ファリスは大きく頷く。

「現在、ヒロエ班に災厄の足止めを依頼、ヒロエ班は災厄の対処に当たっています」

リリムは低い身長を補うかの様に背伸びをしてファリスの方をみている。

「……リリム、園にいる全ての人間を連れてゲノムに避難しろ、奴の足はわたしが止める。」

レナスは素早く寝間着を脱ぎ捨て鎧を着付ける。

「ダメです姉さま！」

「そうですよー！やめて下さい姫様！」

レナスはその声を見殺してリリムとファリスに背を向ける。

「【何をしている！急がないか！！】」

レナスは言霊で命令しリリムは顔でのみ嫌だ…と表しながら抗えないかのように急いで出ていく。しかしファリスはその場に残り、レナスの背中を睨む。

「姉様！わたくしも一緒に！」

レナスは首を横に振る。

「ダメだ」

「何故です！？」

ファリスは断固として引かず、レナスは振り返りファリスの胸ぐらを掴みあげる。

「お前が死んだら！誰が龍姫の伝統を後に伝える！？」

ファリスは遂に泣き出して胸ぐらを掴む手を両手で握る。

「安心なさい…わたしは死にませんから…だからお願い…」

レナスは優しくファリスの手を剥がして肩を叩く。そして再び厳しい顔つきに戻り、

「確りしろファリス！お前の任務を遂行するのだ！」

そしてファリスの細く華奢な身体をドアの外に突飛ばし、フルフェイスを脇に抱えて窓の外に駆け出し、待機していたフルールに飛び乗った。

一方城門では…。

『ぎゃはははは！！』

白いそれは高らかに笑っていた…その足元には先程までは動いていた乙女の亡骸が転がっている。その目の前にはシャツにズボンといった乱雑な格好、漆黒の長い髪を後ろで束ねた猫背の女と向き合っている。

「ヒロエ班長…」

ヒロエは班長とよんだ部下に目を向けずに応える。

「死者は？」

部下は顔をしかめて俯く。

「三名…始めの攻撃で…」

それだけ聞いてヒロエは目を伏せ、部下の肩を叩く。

「わかりました…」

そして前に出てそれを睥む。

「僕の部下を三名も殺してくれたそうですね？」

部下から槍を受け取りながらヒロエは矛先をそれに向ける。

『はあ？、我々の餌がなにいつてんだ？…』

それは、さも当然と言いたげに腹を抱えて笑う。

「結構…」

ヒロエは素早く間合いを詰め、その笑顔に向かって槍を伸ばす。

『つとを！』

それは楽しそうに首を傾げるように射線から外し、瞬く間にヒロエとの間合いを詰め、まがましい光を放つ拳をヒロエの顔面にむかって放つ。ヒロエは槍をその首に押しあて、半身になって避けると同時に槍を振り回してそれを薙ぎ倒す。

『ぐえ！！』

それは地面に顔面を擦り付けられて沈み、ヒロエは倒れるその体に槍を何度も突き刺す。

『うぜえ！！』

それは反転しながらヒロエの槍を掴み、足を振り上げる。

「ふん…」

ヒロエは槍を手放して足を避ける。その足は槍をたたきおり、それは瞬きよりも早く立ってヒロエを追撃する。

「すう…」

ヒロエは大きく息を吸い込む…しかしそれはまるで気にせず、右腕を大きく振るい、ヒロエは身を屈めてスレスレで頭上を抜けさせ、口に貯めた息を相手に吐き出す。

「ぶ…!」

真っ黒な液体がヒロエの口から噴き出されてその体に降り掛かる。

『な! なんじゃこりゃ!!!』

さすがのそれも後退りして体に付着した黒い液体を振り払おうとする。

「ヒロエ班長!」

ヒロエは振り向かず、亡骸から槍を拾い構え相手を見つめる。

「今の内にゲノムへ退避しなさい、姫様ならそう命令するはずです」

『ぎやははははは! まあいいや!!!』

黒い液体の正体はヒロエのレイブン【吸血液体】…吸血液体は付着した生き物の生命力を僅かずつ吸収して仕留めるレイブンである。しかしまるでダメージにならないというように、それはニヤニヤと笑いながら走ってくる。

「厄介ですね…生命力のケタが一つ二つ…違うようです」

ヒロエは苦笑しつつも走りだし、真っ向からぶつかり合う。

『ひゃはあ!!』

それは指をきれいに揃えてヒロエの胸元に向かって伸ばす。それはまるで腕全体が槍となったような一撃であり、ヒロエは即座に防御不能だと理解、後ろに身を引いて抜き手の届かない位置に退避し槍を伸ばす。

『ぎやはははは!!』

それは突き出した手で槍を掴み、一気にへし折ると足を振り上げヒロエの腹を目掛けて伸ばす。

「そんな攻撃…」

ヒロエは再び後退しようとした瞬間、背中を衝撃が襲う。

「が…はっ…」

ヒロエは背中を蹴られその前に飛ばされる。『何故?』…ヒロエは必死に状況を理解しようと噎せ返りながら相手の足を見た。相手は足の膝までが空間の中に消え、膝から下がヒロエの背後から襲いかかってきていたのだ…つまり…

「空間を…跳躍できるということ…ですか…」

しかし遅い。それはヒロエの首を片手で鷲掴みにして地面に投げつける。

「あっ…」

ヒロエは地面に身体を叩きつけられ、二度バウンドして転がり、止まる。

『あれ？ おっかしいな…死ぬ筈なのに…』

それは腕を開いては握りしめるを繰り返す。吸血液体で生命力を弱められた腕力ではそこまで至らなかったのだ…しかしそれでも思い切り地面に叩きつけられたヒロエは動けない。

「く…かは…」

ヒロエは口から血を吐き出して噎せ返りながら、手に力を込める…が、背中から全身に痛みが駆け巡り、動く事が出来ない。『背骨を遣られましたか…』ヒロエは頭の中で苦笑して奥歯を噛み締める。

『ま…あたまをぶつつぶせば死ぬか？』

それはニヤニヤしながらヒロエに歩み寄り、そして足を振り上げる。

『じゃあな〜♪』

ニヤニヤしながら足を振り下ろそうとしたその瞬間、その胸元に太い鉄の槍が突き刺さり貫通する。

『ぐお？…』

貫通した槍もろとも、凄まじいスピードでそれを運んでいく飛竜、

それは正しくレナスだった。

「フルール!!」

レナスはそれのついた槍を大地に向かって投げ落とす。

『ぎゃは…きやがった!! 竜姫!!!』

それは不気味に笑いながら地面に落下し、激突する。

「はああ!!」

レナスはフルールの後ろ足の付け根に付けられた槍を格納する鞘からランスを抜き、一気に急降下していく。

『ぎゃはははは!! うぜえうぜえ!!』

それは素早く立ち上がり槍を引き抜くと、真っ直ぐ向かってくるレナス目がけて投げつける。しかしレナスは空中でフルールもろともバレルロールで円を描くように避けつつ投げられた槍を掴み、同時にフルールを蹴って飛ぶ。

『ぬお!?!』

それはレナスを眼で追い、フルールへの注意がそれる。

【キュオオオ】

フルールはその隙を縫うように堅い頭の甲殻を相手にぶつける。

『ぎ！…きさま！！』

フルールの体当たりをもらにうけたそれは地面に膝を折り、その間にフルールの鞭のような尻尾に空へたたき飛ばされる。

「はああああ！！！！」

そして追撃をかけるように上空からレナスがその体にランスを突き刺し、レナスは空中でその顔面を蹴ってさらに飛び上がり、絶妙の呼吸で急上昇したフルールがレナスを拾う。

「くたばれー！！！！」

レナスの指示を受けたフルールが口から疾風の弾丸を発射し、地面に激突したその上から被せるように追い討ちを浴びせる。

「やった？」

大地は土煙に覆われ見ることは出来ない。

【クルクル…】

フルールは上昇を始める。

「フルール？」

フルールは怯えたような声を上げて上昇を続ける。

『ぎやはははは！！！！いい！！この痛み最高だあ！！ぎやはははは！！！！』

下の煙の中でバカ笑いが聞こえる。同時に土煙の中から槍が飛んでくる。

「いけない！…フルール！！」

槍の中にはまがましい光が込められている。レナスはそれを見逃さず、フルールの手綱を強く引きながら降下させる。しかし…

【カツ】—まばゆい光とともにレナスとフルールの身体を激しい痛みが駆け抜けた。

「きゃああああ！！」

レナスとフルールはそのまま脱力して落ちていく。

【ドーン】—フルールは最後の気力を振り絞り、柔らかい地面に不時着する。レナスは地面に投げ出されて転がり、仰向けに倒れたまま動かない。

「あ…あ…あ…」

レナスは呻くのがやつとで既に気を失っていた。

『ぎやははははは！！ 竜姫くさぞやうめえんだろくな？』

レナスに歩み寄ったそれは膝をおり、涎を拭う。

『どっから食ってやろうか…』

レナスを舐めるように見回し手を取る。

『やっぱ腕!!』

口を大きく開け。

【ドズン!】―それは頭に何か突き刺さる感触に不自然な何かを覚えた。

『あ?』

【ドン!!】―同時に頭に突き刺さった何かは爆発し、その顔面を吹き飛ばす。

『ぎゃあああ!!』

さすがのそれでも悲鳴を挙げて顔を押さえてのた打ち回る。

「しゃっ!」

撃ったのはキッドだった、キッドは体に似合わない程大きなライフルを持ってガッツポーズを取る。ハンマーホエールの下部カタパルトからの精密狙撃だった。

『や…ろお!!』

それは怒りの眼差しをハンマーホエールに向けるつつ、レナスを抱えて逃げようとする。

「【姉様を降ろしなさい!】」

何処からともなく響く声、それは意思に反してレナスを地面に降ろしていた。

『あ?』

そこに流星の如く飛び込んでくる赤い何かは、手に持った薙刀でその両腕と胸元を一刀のもとに切り裂いて両腕を切断する。

『ぎゃあああ!!』

ブシャアアと血飛沫が舞い上がり、それは悲鳴を挙げる。更にハンマーホエールから狙撃された弾丸が悲鳴をあげてそれを黙らせる。飛び込んできたのはファリスだった。ファリスはレナスの両脇に手を通して引き摺りながら、フルールに向かう。

「【フルール! 起きて!】」

ファリスが言霊を使うと、フルールは顔を上げる。

「【お願い! 飛んで…わたくしの姉様を!…】」

『てめえクソがああ!!』

無くなった両腕を気にすることなく、それは突っ込んでくきてファリスの身体を突き飛ばす。

「きゃあっ!」

ファリスは体当たりをもらって受けてレナスを投げ出して体勢を崩す

も、フルールはレナスをくわえて飛んでいく。

「や…やった…」

ファリスは震える身体を持ち上げフラフラ立ち上がる。

『じゃあてめえを食うまでたー!!』

地面を這うファリス目がけ、それは飛び掛かり、ファリスの上に馬乗りになる。

「きゃああああ!!」

ファリスは両腕を振って足をばたつかせて抵抗するも、ソレは二の腕から先のない両腕でファリスを押さえつけて、その服を噛み千切る。

「きゃああああ…神様!…神様あ!!」

ファリスの心は恐怖で凍てつき、普段なら羞恥で口もきけなくなるような下着姿にされているのもお構い無しに神の名前を呼び体を震わせる。

『ぎやはははは!いいねその!』

【カチャ】

しかしそこまでだった…その口の中に何かが押し込まれ、ファリスは涙をぬぐい上を見上げる。そこには自分と同じくらいの少年が拳銃を口の中に押し込んで立っている姿があり、ファリスにとって

はその姿は神の使いのように見えた。少年は笑いながら引き金をひく…

「うぜえよ…てめえ」

【ドン！】―少年の拳銃から弾きだされた弾丸が、ファリスの体に乗っていたそれを頭もろともぶち抜き、ぶっ飛ばす。そして少年はファリスを素早く抱き上げ、そして地面を蹴る。

【シュゴー！】―凄まじい轟音と共に少年とファリスの体が空に浮き上がり、ハンマーホエールへと向かって行く。

「あ…あの…」

ファリスは少年の顔を見つめる。

「なんだい？」

少年は首を傾げる。

「そ…その…」

ファリスは俯き、真っ赤になって縮こまる。少年は首を傾げ、同時に自分の服が濡れていく事を感じる。

「も…漏らしちゃ…」

羞恥で赤面するファリスに少年は苦笑する。

「何もいうな…」

少年はそれだけいって、ハンマーホエールの機内に入って行った。

『があああ！！！、ちきしょおお！！！！？』

それは悔しそうに地面を叩きつけ涙を流す。

『誰の責任だあ！？』

『ルウだろ！？折角の餌！！』

『ルウは悪くないもん！！』

『うそおっしゃい！！手をぬいたのはルウじゃない！』

『そういうアイだって！！』

『まあまあ喧嘩しては』

『ミウは黙って！！』

『確かに…二人…五月蠅い』

『ちょっとサレ！？、ならあんたにも責任！！』

『まあいいべ？おらあまたあの犬の女くいてえな』

『やだやだ！じゃあ次は？』

『神子…』

『サレ！それいいね！！』

それの中の五つの魂が再び一つになり、それは立ち上がる。

『龍の神子…くひ！旨そうだな…』

それは、フラフラと不気味に歩いて消えていった。

「はっ…くしゅ！」

フリルは大きなくしゅみをして槍を落とす。

「大丈夫かい？」

ソロンはフリルにボロ布を渡し、フリルは受け取ると鼻をかみ、鼻を拭う。

「ん…大丈夫…」

フリルは手をひらひらしながらボロ布を捨てる場所を探す。

「ああ、ゴミはこっち」

ソロンは魔物の皮で出来た袋を取出してゴミの中に入れる。

「体の方はどう？」

ソロンに言われてフリルはニヤリと笑う。

「まあまあね、だいたい50%位かしら…」

再び槍を拾いあげ、小さく構える。すう…と呼吸を整えて右足を前に踏み出し、体重をかける、ぐっと土に足がめり込むのと同時に地面を蹴りつけての摺り足…真っ直ぐ進んでは戻り、左右に身体を振る。突くことはせずに前に後ろに摺り足を使い間合いを計る。

「へえ…」

ソロンはそんなフリルを見て思わず感嘆の声をあげる。フリルの姿はまるで神々しい舞いを待っているかのように優雅であり、戦場の華という噂も強ち間違いではなかった…と確信する。二人は街から少し離れ、龍の荒野にあるオアシスに来ていた。水辺は凶悪な恐竜がうじゃうじゃいるのだが、既にフリルが皆撃退してしまった…といっても殺す程のダメージを与えた訳でも、自然にでたら生きられない程のダメージでもない。単なる打撲による打ち身で退却させた、水を飲みにくる恐竜を追い払ったりはしなかった。

「今日の御飯なに？」

フリルは流れるような型を一通り決めながら横目で聞いてきた。

「そうだね…：スパゲティが余っているから、茹でたスパゲッティと野菜のサラダ、後はスープかな？」

ソロンは真面目に献立を考えるように頭を巡らせる。

「なら今日は恐竜肉のステーキにしましょ？」

フリルは型を決めながら口走る。

「へ？…恐竜？」

ソロンの声にフリルは頷く。

「何処に恐竜の肉なんてあるんだよ…」

ソロンに言われてフリルは型を止めて槍を地面に突き刺す。

「あるじゃない、そこらじゅうに」

フリルは周りを見回す。

「ま…まさかとは思うけど…フリルちゃん？」

ソロンは改めて聞こうとする、するとフリルはニヤーと笑う。

「一匹位狩っても絶滅なんてしないわよ」

「いや、そういう意味じゃなくて…」

ソロンはフリルの身体を下から上まで見つめる『こんな幼児体型の子供が恐竜を狩る？、止めた方が』等と考えているとフリルが動く。

「あ！アレに決めた！」

フリルは意気揚々と走って行く：ソロンが振り返るとそこには小さな二脚獣がいた。実に可愛い恐竜である。しかしフリルはそれを狩るのか？否：フリルは可愛い恐竜を無視し、その後ろにいた恐竜に飛び掛かる。

「でやあああ！！」

「ちょ！！フリルちゃん！！」

ソロンの目の前にいた恐竜の名前はギガントレックス：龍の荒野の中で生態系のトップに君臨する巨大な恐竜。過去、ソロンの街はギガントレックスに襲撃され、多大な被害を被っている。しかしフリルは意気揚々と飛び掛かるとその顔面に槍の腹を叩きつける。

【ドオン！】―激しい打撃にギガントレックスの身体が吹き飛び、フリルはその後を追うように地面をける。ギガントレックスは驚いたような目をしているが、直ぐに恐怖へと変わる。

【ドジャア！】―フリルが立ち上がるギガントレックスの左足の関節に槍を突き刺すと、ギガントレックスは咆哮をあげながら地面にひれ伏す。そしてフリルは間髪入れずにギガントレックスの頭の上に乗り、その脳天に槍を突き立てる。凄まじい衝撃が稲妻のごとくギガントレックス頭蓋の中を駆け巡り、脳ミソを粉々に粉碎し、ギガントレックスは動かなくなった。

「なにこいつ：弱いわね：」

フリルはがっかりしたような溜息をつきながら、自分の何十倍も巨

大な恐竜を弱いと吐き捨てる。

「ふ…フリルちゃん…」

「さ！街の人呼んでこれ運ぼう！」

ソロンの街の人は皆貧しかった。だからこそ助け合い、めったに食べることの叶わない肉が手に入るとなればこぞってやってくる。ソロンは皆を呼びにいき、フリルは一人残ってギガントレックスの血管という血管を突いて血抜きし、まつこと数時間、街中の人がやってきた。

「お…まじでギガントレックス？」

「ギガントレックスだ！」

「げ…」

口々に何かを言いながら、数百人の人達はロープ等を使って街の中央にギガントレックスを運び、酒場や料理屋の人間に手伝わせての豪快な解体ショー…肉の切り分けが始まり、フリルは足の肉を大きく切り取るとそそくさと帰ってしまう。

「フリルちゃん？、それだけでいいのかい？」

フリルは振り返って、頷く。ソロンは両手で抱えきれない程の大きなトレーに大量の肉の塊を山盛りしていた。

「ソロン！いい嫁さんだなっ」

そんなソロンの肩を知り合いである肉屋の親父が叩いてきた。

「ばか、そんなんじゃないよ！」

ソロンは慌てて否定するが、肉屋の親父達はニヤニヤと見つめて続け、ソロンは逃げるように素早く自宅に入って行った。厨房には既にフリルがおり、フリルは肉を水で洗っていた。

「なにしてんの？」

フリルは挙動不審なソロンの様子を軽くスルーして、肉を洗い終わると何枚かに分けて切り分け、上から切れ目をいれてオイルを染み込ませ塩と胡椒で味付け、暖炉を指差す。

「【インフェルノ】」

フリルの指先から火花が飛び出して暖炉の中で炎が燃え上がる。

「…なに？」

フリルはソロンを見ると、ソロンは感心したような目をしていた。

「君、料理も出来るんだね…」

フリルはフライパンを手で油を敷き、肉を乗せる。

「出来ないわよ？」

肉を焼きながら顔を向け、香ばしい肉の匂いが出始める。

「いやゝ美味しそうだね」

フリルは肉をミディアム位に焼くと、二枚目を焼きだす。

「どうかしたの？」

ソロンに聞かれ、フリルは俯く。

「こんなところで、ずっとこんなことしていいのかなって…思ってたさ…」

日は既に沈みかけていた…フリルは何処か寂しそうに肉を焼いている。ソロンも不思議な気分だった。大陸を救った英雄の少女が自分の家で肉を焼いている…しかも自分だけではなくソロンの分もある。

「ソロン、見てないでサラダ作ってよ」

フリルは横目を向け、ソロンははっと思い出したように動きだす。そしてフリルは初めての食卓での食事だった。

「頂きます…」

ソロンは前で手を合わせるフリルを見つめる。

「なに？」

フリルは肉をナイフで切りながらソロンに目を向ける。

「いや…綺麗だなく…て思ってたね」

「!?!?」

ソロンに言われてフリルは顔を赤くしてナイフを落としてガチャガチャと音を鳴らす。

「じ…冗談よね?」

フリルの一言にソロンは首を横に振る。

「ううん?、君は十分魅力的だと、僕は思うけどね…」

ソロンは頬杖をついて表情を綻ばせる。

「お肉! 冷めちゃうわよ!」

フリルは話を反らして肉を頬張り、モグモグと味わう。ソロンもフリルを見ながら肉を口に運ぶ。

「ん」

「お」

ソロンとフリルは同時に顔を見合わせる。

「美味しいね」

ソロンは肉を次々と口に運び、フリルもそれにつづくように口に運ぶ。

「ん…おいひ…」

フリルは幸せそうに頬を膨らませてもぐもぐ動かしていると、ソロンがナプキンを手にフリルの口元に押しあて拭う。

「ほら…汚れてるよ？」

フリルは途端に真っ赤になり後退りする。

「な！…なな！なにすんのよっ！」

フリルはソロンの目線から顔を反らす。

「あ、いや口元が油まみれだったからさ」

ソロンはにこやかにわらいながら席につき、肉を食べはじめる。食事が終わるとフリルは浴場にいた。

「いた…」

肩の傷が若干染みるものの痛みは大分癒えてきた…完治も時間の問題だった。

「完治したら…帰らなきゃいけないのか…」

フリルは浴槽の中で背筋を伸ばして天井のランプを見上げる。フリルはここでの静かな生活もいいのではないかと考える。

「荒野で恐竜狩って…みんなで分け合って、持ってかえって料理して…ソロンと…」

フリルはそこではっと意識を戻す。

「…なんでソロンがでるのよ…」

フリルは頭の中にソロンを浮かべる、間抜け顔で優しく、たまにスケベ…。

「ん…」

少し胸がドキドキする感覚にフリルは戸惑いすら覚えた…フリルはその感覚が薄々と気付いてしまう。

「…ブクブクブク…」

フリルは耳まで真っ赤になると口元まで沈んでお湯の中で泡立てる。暫くしてから出ると、いつの間にかタオルと着替えが置かれていた。

「ソロン…」

寝間着に着替えたフリルが自室に向かうと、そこには電力を失って転がる携帯があった。

「ま…いっか…」

フリルは携帯をバックの底に押し込み、布団に横になった。フリルはその日、何故か安心して眠りにつけたのであった…。

朝：外がガヤガヤと喧しかましく、身を起こす。

「ソロン？」

目の前にはソロンがいた。

「やあフリル、おはよう」

ソロンは窓の外を見つめている。

「何？…」

フリルに問われてソロンは首を横にふる。

「ああ…いや」

ソロンの不自然な動きに首を傾げたフリルは窓の外を見る。

「我々はゲノム王国の兵である！、聖騎士団の命により食糧と金を要求する！！」

フリルの見ている前で、三人の男が民衆を前にわめき散らす。

「しかし…この前我々は食糧を渡したばかりですし…」

長老らしい老人が前に出ていく。

「ええい！！つべこべ抜かすな！！」

男の一人が老人を突き飛ばす。

「ないというなら！」

さらに男は、足元にいた子供を奪い取る。

「ああ！おやめください！！」

母親らしき女がすがり、男は女の顔面を殴り付ける。

「お母さん！」

「はっはっ！なんだその目は……」

フリルの頭で爆薬が弾け、灼熱の業火が燃え上がる。

【ガタン！】——窓が激しく開け放たれ、ソロンが気付いた時、フリルは横にいなかった。

「さあ！さっさと……」

子供をつかんでいた男の顔面に小さな拳がめり込むと、馬に跳ねられた時に似た衝撃が男の身体を叩く。男は真っ直ぐ飛んでいき、地面を転がって動かなくなる。

「は！班長！！」

フリルは飛んでいった男を無視して唾然としている男の子を、鼻を押さえている母親らしき女の方に走らせる。

「もう、離しちゃだめよ」

フリルはそう言って、班長らしき飛んでいった男の取り巻きの二人に目を向ける。

「きさま！班長をよくも！」

一人がフリルに食ってかかり胸ぐらを掴む。フリルはその手を両手で掴み、地面にねじり倒す。そして少し体重を入れる。

【バキ！！】

「ぎゃああああ！！！」

子気味いい音と共に、男が悲鳴を上げてのたうち回る。

「関節外しただけでなに喚いてるの？、なっさけないわね…こんなのがゲノムの兵士だなんて笑わせるわ」

フリルは地に伏せて押さえる手を踏み潰してグリグリなじり、男の悲鳴をききながらも一人を睨む。

「き！！きさま！こんなこととして！聖騎士団が黙ってないぞ！？」

フリルはため息をつく。

「聖騎士団心得ー！！」

フリルは大声を挙げる。

「一つ！民は国の宝！いかなる街にも誠意をもつ事！」

男は啞然とし、集まっていた民衆も口をあけている。

「一つ！我等が武は民の為にあり！！」

しかしフリルは止めない。

「一つ！！聖騎士団隊長フリル・フロルの命により！！他国への民に対する態度は常に紳士な態度を示す事！傷つけるなど言語道断！」

フリルはそこまでいって大きくため息を吐く。

「な…なにを言ってるんだきさま…」

男は、啞然としているそしてフリルは溜息を吐く。

「まだ気が付かないの？あたしは！聖騎士団隊長！フリル・フロルよ！！！」

フリルは大声で名乗りを挙げると、男はすくみ上がり、先ほどまで啞然としていた人々が目を向ける。

「フリル…フロル？…」

下の男がフリルを見つめて蒼白になる。フリルは無意識に両目を黄金に輝かせて睨んでいたからだ。

「二度とこの街に近づくな…いいわね」

フリルは男を解放すると、男たちは血相かいて逃げていった。

「ふう…」

フリルは踵を反して後ろにいた長老や民衆に頭を下げる。

「わたしの監督不行き届きです…すみませんでした…」

しかし長老は首を傾げる。

「はて？、ワシは耳がおくてのう…聖騎士団？…あなたはフリルさんじゃろ？」

人々は皆フリルを笑顔で見つめ、俺も、わたしもと口々に聖騎士団のフリル隊長ではなく、フリルさん…フリルちゃんと呼んでくれた。

「フリルちゃん！」

ソロンが現れ、フリルはソロンの方に走る。

「さっすがフリルちゃん！向かうところ敵無しだね」

ソロンはフリルの頭を撫でながら見下ろす。

「そんなことない…」

フリルはポツリと一人呟いた。

「そうだフリルちゃん、朝ごはんなんだけど…」

「へ？もう無いの？」

「朝から肉なんて身体壊すでしょうが…」

ソロンに言われてフリルは確かにと頷く。

「龍の荒野でなにか採りに行く？…そうねえ…サボテンとか！」

ニコニコとフリルは笑顔で反し、ソロンもいいねと笑顔になる。フリルはもう帰る事を忘れていた。そこに危険が迫っているとも知らずに…

【皇帝の恐怖】（前書き）

ソロンに助けられたフリルは、訪れた騎士ではなく、一人の女の子としての平穏な生活の中で、安心を取り戻しつつあった。だが、その一方で騎士としての自分と、龍の神子としての運命はそれを許さうとはしてくれなかった…。激動の第四話

【皇帝の恐怖】

機動要塞ハンマーホエールの船内にある医務室にいた、アルの目の前にはベッドに寝たきりのゼリム、思わず抱き締めたくなる薄幸なイメージをもつファリス、そして険しい顔も魅力的なレナスの姉妹に加え、三人の帝龍がいた。

「無能皇帝?…」

ジャージ姿に肩まである長髪の男、アル・フロルはハンサムな顔を崩して怪訝な顔をする。

「ああ…」

容姿は幼い金髪の少女…ブリューナは相槌をうつ。

「それは具体的に何なんだ?」

そんなアルの脇ではミーナがωのような口をヒクヒクとさせてゼリムの看病をしている。アルフがブリューナに視線を合わせると、ブリューナは手を擦りながら。

「無能皇帝とは奴の俗称、本当の名前は…【五神帝龍】一つの体に五つの首を持った龍だ…」

アルは眉をひそめゼリムのベッドに頬杖をつく。

「で? あいつの目的は?」

アルに聞かれブリューナは顔を背ける。

「この星に生息する帝龍の虐殺：龍の神子の殺害、生ける生命全ての死、そしてこの星を破滅させること…」

アルは息を飲む。

「なんじゃそりゃ…」

ブリューナの言葉をフレグニールが繋げ、続ける。

「我々帝龍はこの星の生命を育む力を与えられている…なので、帝龍がいなくなれば…星は死に絶える事になるのじゃ…」

『じゃあ何故おまえらはフリルを狙ったのだ?』

内臓器官が大分回復したゼリムはフレグニールを睨み、アルは大きく溜息をついてゼリムを見る。

「彼女：龍の神子の魂と肉を無能皇帝に捧げる事で無能皇帝を再び眠りにつかせようとしたのじゃ…」

「五神帝龍はフリルも狙ってんだよな?…」

アルに言われてフレグニールは頷く。

「なら…やべえ…一刻もはやくフリルを探さねえといけねえな…」

朝：フリルは夜明けと共に目を覚まし上体を起こす。辺りはまだ暗い、フリルは寝癖の残る髪の毛を放置して重い瞼を擦ってから隣に目を向ける。

「…スー…」

隣では髪の毛の長い長身の男：ソロンがそのハンサムな顔立ちを崩して眠っていた。フリルはソロンを無視してベッドから抜け出すと、うーっとうめき声をあげながら背筋を伸ばし、部屋から出て洗面室に向かう。

「はわぁ…寒」

荒野の朝は寒く、フリルは無駄な脂肪の少なく細い身体を両手で擦りながら千鳥足で洗面室に入る。洗面室にはひび割れた鏡を正面に脇には小さな風呂がある。フリルは桶を手にとると風呂の脇にあるタルから水を掬い、洗面台まで運ぶと、顔を洗い寝癖を溶かす。そうして食卓に向かうと釜戸に火を入れて部屋を暖ながら服を着替える：フリルはソロンからお金を貰い、いくつか服を買っていた。着替えたフリルは玄関に向かうと靴を履いてドアの横に掛けてある防寒マントと手袋を身に付け、エメラルドに輝く刃をもつ槍を背中に背負うと表に出る。ソロンの家は外に出ると直ぐそばに井戸があり、フリルは井戸から水を掬って魔物の皮の水筒に水を補給すると、一口水を含んで濯ぐ。

「あら、フリルちゃんいつも早いわね」

その背中に声をかけられ、フリルは口の水を地面に吐き捨てて振り向く。

「あ、おばちゃん！おはようございます」

フリルは深々とお辞儀しおばちゃんはいいやと苦笑して手をヒラヒラふる。

「フリルちゃんはここに来て、もうどれくらいになるんだっけ？」

おばちゃんは水を汲みにきたようで、手には大きなバケツが握られていた。

「ああ、手伝いますよ」

フリルはおばちゃんからバケツを奪うと、おばちゃんはいつもわるいね、といって微笑みかける。

「1週間…くらいですかね…」

フリルは井戸から水を汲み上げながら呟く。すっかりケガもよくなつたフリルはこの村にいついて既に1週間がたっていた。

「1週間か…こんな事いいたくはないけど…あんた騎士なんだろう？、こんなところにいていいのかい？」

フリルは水を汲んだバケツを手にも首を傾げる。

「そりゃ、あんたはいい子だし腕っぷしもある…この村はあんたがいたら大助かりさ」

おばちゃんはバケツに手を出すがフリルは首を横に振る。

「持っていきますよ」

「いつも悪いね」

「いえ…」

おばちゃんは笑顔で背を向けてフリルは横に並ぶ。

「でも、あんたがいたらこの村の人間はあんたに依存しちまう…それにあんただってゲノムの騎士なんだ…ずっと城を離れるなんて無理な話だ…」

フリルは俯く。

「そうですね…」

しかしおばちゃんは首を横に振る。

「あたしは別にあんたを苛めたくて出ていけなんていつてるわけじゃないよ、あんたはこんなチンケな村で一生を終えちゃいけない…だから…早くお城に戻んなさいよ？」

フリルはおばちゃんの自宅の玄関まで水を運ぶと、村の外に向かう。

「…そっか…」

フリルはまだ暗い空を見上げ、おばちゃんに言われた事に心を揺さ振られる。

「はあ…」

大きなため息を吐いて、朝の狩りに出た。

「うゝ…寒い」

そして場所は変わって龍の荒野：一人は長い髪を風になびかせながら防寒マントの中で身を縮めて鼻水をすすする。

「ガハハ！マリア殿は寒がりじゃなあ！」

そのまえを上半身裸に巨大な剣を背負ったゴツゴツとした強靱な肉体を見せる中年の男が笑う。

「アドレーさんは…寒くないんですか？」

マリアに言われてアドレーはガハハと豪快に笑う。

「ガハハ！わしの故郷はこんなもんじゃないわい！」

元氣な老兵は高らかに笑う。

「しかし、本当にこんな場所に村なんぞあるんかのお？」

アドレーは広い荒野を見渡して白い息を吐きだす。

「ええ…でも隊長を見たという情報も多いんですよ？」

「そりゃ…娘っ子の亡霊じゃあるまいな…」

マリアは首を横に振る。

「さあ…」

マリアはそうして空を見上げる。

「隊長は大馬鹿野郎です、生きていても死んでいても…一発、いえ、もう…一杯殴りますよ」

マリアは笑っているが眼が笑っていない。

「おー…こわいこわい…」

アドレーはその怖さに背筋がゾツとし、そして向き直る…その時。

【ズッドオオン！】―遠くで爆炎が撒きあがる。

「!!?」

マリアとアドレーは慌ててその方向を見上げる。

「あの…方角は…」

時を同じくしてその爆炎をフリルも見上げていた、そして気付いた

時には獲物を捨てて駆け出していた。

「ソロン！！」

フリルは疾風のように駆けて村に向かう。そうしてたどり着いた時……既に村は炎の海だった。

「やあああ！！」

遠くで悲鳴が上がり、フリルは慌てて駆け出す……目の前の炎を両手のレイブンでかき分けてものともせずに全力で……。そこには一匹の生き物が小さな子供を抱き締めるようにしていた。

【ゴロン】——小さな子供の首が転がって地面に落ちる……それは小さな女の子の顔、その見開かれた目はフリルを見上げ……。

「き……さ……まああああ！！！！！！」

フリルは駆け出し、子供の身体を食うソレの背中に、全力のレイブンを纏わせた右足を振るう。

【ドズン！】——爆発を思わせる衝撃が右足の激突と共に発生し、その身体をぶっ飛ばし……それは地面をガリガリ削りながら飛んでいく。

『ぎ……きひひ……』

それは気色悪い程に真っ白で、気色悪い程に真っ赤な目を見開いて、気色悪い程に歯を見せて頬を裂いて笑う。

『きひひ!!ぎやははは!!!!』

【ドン!】――空気を引き裂くような音と共に倒れていたそれは消え、フリルの背後に周り、両手をフリルの体に回し抱き締めようとする。フリルはしゃがんで両手をかわしながら身を回し、裏拳をその腹に当てる。

【ズン!】――凄まじい衝撃が裏拳があたった…と同時にソレの腹に襲いかかり、ソレは思わず腹を押さえて後ずさる。

『うぎ!』

フリルさらに回転しながらその両足を左足で払い、こんどは逆の裏拳でその身体を尻ぎ払う。

『うげえ!!』

それは嘔吐物を撒き散らしながら地面にめり込み、血液を撒き散らして痙攣する。

「はあ!!」

フリルは背中の槍を回しながら構え、倒れた体に槍の矛先を延ばし…突き刺す。

【ドン!!】――槍の矛先から衝撃が迸り、その上半身と下半身は真っ二つに分かれて血を撒き散してバラバラの方向に吹き飛ぶ

「フリル!」

同時に背後から声がした：フリルが背を向けると、そこにはソロンがいた。フリルは決まったと思い、そして背を向ける。

「ソロン！無事だ：」

【ドズン！！】―突き抜ける衝撃。

「あ…ごふ…」

フリルは口から血液を吹き出してむせ返る。フリルが下をみると、そこには真っ二つにして吹き飛ばしたハズのその手があった。

「フリル！！」

『いや…つええつええ！やばかったよ…本当…』

そのまま手が引き抜かれ、フリルはその場に蹲る。

「…！！…」

フリルは声も出せずに身悶える。

『ぎやはははは！！！！だがもうおしめえだ！！ぎやははははははははは！！！！』

それは大笑いをあげながら、フリルを掴んで口をあける。

【シャイン！！シャイン！！】―その刹那、ヒカリの球体がその前に現れ、強烈な閃光が迸る。

『ぎ！！！ぎやああ！！！！』

光を浴びたそれはフリルを投げ出して目を抑えて仰け反り、その体に巨大な何かが食い込む。

「ほれ！ホームランじゃああ！！！！」

逞しい腕が巨大な剛剣を振りまわし、その身体を空高く打ち上げた…そうマリアとアドレーである。

「隊長！！！！」

マリアはフリルに駆け寄り、フリルを抱き上げる。

「マリア！！手当てはあとじゃ！！にげるぞい！！！！」

「あ…あ…」

「ほれ！！！！いくぞお！！！！」

放心しているソロンの胸ぐらを掴んでアドレーは走りだし、マリアも後に続く。

「げ…えふ！！！！」

場所は龍の荒野、小さな洞窟にいた。

「うそ…」

マリアはフリルの傷口に何度も回復の魔法をかける。しかし傷口は

一向に塞がらない。

「な…どうしてじゃ!？」

アドレーはマリアを見る。マリアは肩を震わせていた。

「傷口が大きすぎて…ふさげないんです…」

マリアは泣きそうな声で呟き、ソロンがフリルの手を握る。

「僕のせいだ…僕が君を呼んだりしなければ…」

ソロンはフリルを見つめ、フリルは血の気が引いて真っ青な唇を綻ばせて首を横に振る。

「…フリル…」

フリルはゆっくりと瞼を閉じる。

「隊長!！」

マリアはフリルの服を掴み、アドレーは目をつぶる。マリアはソロンを睨むように見据えると、

「なんですか!?! あなた!?! あなたのせいで隊長は!?! 隊長は!?!」

マリアは悲しみを怒りに変えてソロンを掴む。

「やめんか!?! マリア!！」

アドレーに言われてもマリアは睨み続け、ソロンはマリアの手を握る。

「…フリルが起きたら伝えてくれるかい？僕は…君を愛していたと…」

マリアは目を見開いて言葉を失い、ソロンから手を離す。

「僕ね、昔から面白いちからがあるんだ…」

ソロンはフリルの胸に手を当てる。わずかな鼓動…次第に弱くなる呼吸…そしてソロンは…

「僕は人の傷を自分に移せるんだ…だから」

「わ…若造…？」

アドレーはソロンを見つめ、ソロンは笑う。

「…あと…頼みます」

途端にソロンの身体が輝きはじめ、みるみるフリルの傷口がふさがっていくそしてソロンの命の灯火が、身体の消失とともに消えていく。ソロンは最後に閉じられたフリルの唇に口付けすると、服だけを残して消え去った。

「は」

フリルが目を覚ますと、夜は明けていた。

「おう娘っこ！おはようさん！」

目の前にはアドレーがいた。

「アドレー？…そうだ…あたし…お腹を貫かれて…」

フリルは服を捲ってお腹を擦るが、そこには傷口がない…いや、お腹の傷だけではなかった…フリルの身体の傷痕が綺麗に消えていた。

「え？…え…」

「隊長…」

動揺しているフリルにマリアが服を手渡す…。

「…え…」

フリルは服を受け取り、マリアを見上げる。

「あなたと一緒にいた男の人の遺言です…『僕は、君を愛していた』…」

フリルは暫し無反応だった。

「ウソ…」

フリルの言葉にマリアは首を横に振り、フリルはアドレーを見る。
アドレーも首を横に振る。

「あ…だって…なんで?…なんで?…だって!…だってソロンは…」

フリルは服を握りしめる。

「彼は他人の傷を自分に移せる力を持っていました…それを酷使して…」

フリルはそこで思い出した、初めて出会った日の事…あの日は…。

「…馬鹿…」

フリルはソロンの服を抱き締め、自然に溢れる涙をを堪え切れない。

「馬鹿!…馬鹿!…!!馬鹿!…!!」

フリルは叫びながら泣き出した。

「隊長」

マリアがフリルの肩に手を当て、フリルはマリアを見上げる。

【ドゴオ!】—マリアの鉄拳がフリルの頬にめり込み、フリルを吹き飛ばす。

「い…何すんのよ!…!!」

「あなたこそこんな所でなにしてるんですか!…!!皆心配して!弓君なんて毎日毎日探して回って!!やっと思ついたら彼氏が死んだ!…!!?なにメソメソメソ!…ムカつくんですよ!…!!」

「なんですって！！！？言わせて置けば！！！！！」

フリルは素早く立ち上がり、マリアをぶん殴って洞窟の外に転がす。

「おい…娘っ…」

アドレーは何か言おうとするが、それよりも早くフリルの顔をマリアの足がぶっ飛ばし、フリルは鼻血を噴き上げて仰け反りながらもマリアの足を掴んで地面に叩きつける。

「ふむ…」

アドレーはため息と共に腕を組む。

「隊長なんて呼ばない！！泣き虫糞ガキ！！！」

「なんですって！！！？糞ネクラオタク！！！」

二人は殴りあい蹴りあい、そして掴み、投げあって最後は倒れた。

「隊長…」

マリアはフリルを抱き締める。

「もう一人でなんて行かないでくださいね…」

フリルはマリアに抱きついて、そして泣いた…。フリルが泣き止んでから暫くして。

「さて、娘っ子…これからどうするのじゃ？」

フリルはマリアとアドレーを交互に見て立ち上がる。

「勿論！あたしはあいつを殺すわよ！」

フリルは片手を握りしめて怒鳴り、マリアはクスクス笑う。

「隊長はこうでなきゃ可愛くないです…」

「マリア…まったく…」

フリルはマリアを見て肩をすくめる。しかし…

『ぎやはははは！！誰を殺すって！？』

荒野に響き渡るあの声…。

フリル達は一斉に洞窟から飛び出すと、目の前にはそれがいた。

「あんたよ…くそ野郎…」

フリルはそれとにらみ合い、アドレー武器を構えマリアは魔方阵を展開する。

『きひひ…雑魚が…よく吠える…我々の名は…ごっ』

【ズッドオオン！】―何の前触れもなく、その足元から巨大なワ

二のような頭が突き出してそれを天高く叩きとばす。

「!?!」

穴から出てきたのは茶色い岩のような堅殻を持った巨大な龍。

「アブソアジル!?!」

『乗って下さい!?!早く!?!』

アブソアジルの上から声が響く、フリルが見上げると、そこには黄金の目を持った美しい女性がいた。

「た!?!隊長!?!」

マリアはフリルを見ると、フリルは頷く。

『にいいがすかああああ!?!!?!』

それは雄叫びを挙げながら走ってくる、女性は立ち上がり。

『水よ…沸き立ち壁になれ』

女性が唱えると、巨大なアブソアジルを中心に水が吹き上がり、津波のようになって。

『ぎ!?!!?!ぎやああああ!?!!?!!?!』

それは津波に飲み込まれ、流されていく。

『アジル!!』

女性の指示を受けて、アブソアジルは地面に顔を突っ込み、潜っていった。

『うぜええ!!!!』

それは右手で津波を払い、ずぶ濡れで中心にたつ、しかし既に気配はなく、それはギリギリ歯を食い縛り、ジタンダを踏みしめる。

『ちつくしょおお!!!!!!』

そして…。

「報告は以上かい？」

場所はゲノム王国の会議室、ゲノム王国の国王エリオールは普段穏やかな表情を険しくする、その隣ではアレクセイの代表である少年マールの姿もある。

「ああ、どうやら状況は思った以上にわりい…」

マールとエリオールに向き合う形ですわるフリルの隣ではアルが深々とため息をつく。

「惑星を滅ぼす存在…五神帝龍…僕は俄かには信じられないんだが…」

マールは険しい顔のエリオールに目を向け、エリオールはレナスに目を向ける。

「奴を封じる方法は無いのでしょうか？」

エリオールに聞かれ、レナスは腕を組む。

「今のところは…フリルを殺して龍の神子をこの世から消す事……それ位ですね」

「却下だ」

アルは素早く却下して首を振り、フリルはアルを見る。

「その両手足へし折ってでも行かせないからな」

アルに睨まれてフリルは俯く。

『倒す事は出来ないのか？』

身体にマントを羽織り車椅子に乗ったゼリムが首を傾げる。あの一件の怪我以来ゼリムの手足は未だに治らず、再生に時間がかかっているらしい。

「ゼリム、お前そんな身体でまだ戦う気か？」

アルは未だ失われたままの両足に目を向け、ゼリムはふんと鼻息荒く背もたれに体重をかける。

『当たり前だ…わたしは魔族だ、手負いだろうが…牙までは折れん！…』

そういうながらも残った左手は首のペンダントを掴んだまま震えていた。

「現時点では…対象を倒しきるのは不可能だとおもいます…」

レナスの隣にいた薄幸なイメージがある赤い髪的美少女が立ち上がる。

『ん？』

「だれ？」

エリオールもマールも顔を見合せて首を傾げる。少女はレナスを一瞥してからコホンと咳払いする。

「申し遅れました、わたくしはファリス、ファリス・T・ハーベストと申します」

ファリスは丁寧にお辞儀すると、レナスが付け足す。

「名前の通り、わたしの妹です」

レナスに言われてフリルとゼリム、そしてマールやエリオールですら顔を見合わせる。

「「ええ！！？」」

「はあ…」

予想していたのか、レナスはため息をつく。

「だ…だって都会には来てなかったし…」

「わたくしも行きたかったのですが…お姉様に反対されてしまいまして…あ、でもお土産は沢山貰いました」

ファリスは携帯を取り出した。

『ふうん、で？レナスはなんで妹を今まで隠していたのだ？』

ゼリムに聞かれてレナスは表情をしかめる。

「それはファリスが…龍姫の子孫だからです…災厄はファリスも狙っていました…遅かれ早かれ…園は…」

【ドガン！】—そこで扉を破り、弓が慌てて飛び込んできた。

「隊長！！」

「どうしたの？」

弓は普段閉じた目を見開き、息を吸う。

「セグマディ共和国が…壊滅しました…」

【ガタン！】—椅子を倒してエリオールが立ち上がる。

「なんだって!？」

【セグマディ共和国】…過去、魔王がいた国…国とはいいながらも巨大な軍事要塞であり、魔王の死後はアグネシアなどからの移民が再編していた。

「話によれば…突如飛来した巨大な五つの首をもつ龍が街を破壊し尽くし…セグマディは…」

弓は首を横に振る。

「ありがとう、弓」

エリオールに言われて弓は下がり、エリオールはレナスを見る。

「恐らく体力を回復するための餌と寝床を確保したのでしよう…二ヶ月は動かないと思います…」

「では、今のうちに叩こう!」

マールに対してファリスが立ち上がり首を横に振る。

「体力が回復していようがまいが…あれの力は圧倒的です…今現在の兵力ではまず不可能でしょう…」

『はい…回復中の彼等は危険です…』

扉から声が響き、フリルたちが目を向けると、そこには先ほどフリル達を救った金髪の長い髪をした美しい女性が立っていた。

『わたしは水帝龍【アクエリア】といいます…』

アクエリアは穏やかな笑みのまま入って来てフリルの肩に手を置く。

『帝龍を代表して謝罪します…フリル…』

フリルはたじろぐ。

「ちよっ…アクエリア様…そんな…」

アクエリアはちらりと睨むアルを見ると笑い掛ける。

「んで？あの糞やろうはどうすりゃ倒せるんだよ…都会印の核弾頭でもお見舞いすつか？」

アルは真面目にいい。フリルは慌てて首を振る。

『核というものが何かはわかりませんが…効率的な方法が一つありますよ』

アクエリアは笑みを崩さない。

『その方法とは？』

ゼリムに聞かれて、アクエリアは頷く。

『五つの頭に宿る五つの擬人化した龍を倒すこと…』

アクエリアスにいわれゼリムは首を傾げる。

『五人？…わたしの時は一人だったぞ？』

その問いにフリルやレナスも頷く。

『それは五つの頭が一つになった存在です、五つの頭が一つになった五神帝龍は確かに無敵です…ですが五つの頭の内、一つでも二つでも欠けたら…彼等は無敵ではありません…』

アルは腕を組む。

「理屈はわかったぜ、だがその五つの頭はどうすりゃ出てくるんだ？」

そう言われてアクエリアは少し苦笑する。

『皇帝は皇帝自身で再生仕切れない程のダメージを受けた時、五つの身体に分かれ擬人化します…』

「チッ…」

アルは不機嫌そうに足を組む。

「つまりは結局、龍の状態の糞やろうを追い込まなきゃなんねえってことじゃねえか…なら今、体力を回復している間にぶち殺しちまった方がいいんじゃないのか？」

それにはアクエリアは首を横に振る。

『体力回復を図るということは寝ている訳ではなく警戒していると言うことです…つまり奇襲や罠は使えません、必ず先手を打たれま

す』

「…成る程な…回復させて油断させ、罠にかけて奇襲…確かにそれなら問題はねえ…だがよ、罠ってものなんだ？都市一個丸々消し飛ばす地雷もあるにはあるが…」

『落とし穴が一番です』

「随分と古典的だな…」

アルに言われてアクエリアは無邪気に笑う。

「落とし穴はいいとして…しかしどうやっておびき出す？…」

エリオールに言われてアクエリアも押し黙る。

「私たち竜騎士は如何でしょうか？」

レナスが立ち上がると全ての目がレナスに向けられる。

「私たち竜騎士がセグマディに先行し、眠る五神に攻撃して誘きだす…」

「だめだ！」

エリオールが立ち上がる。

「そしたら君たちが犠牲になるじゃないか！」

レナスは首を横に振る。

「我々も精鋭であり騎士です…戦場で死ぬのも覚悟の上…国の為に命をかけるのは当たり前です」

「ならば…!」

『なら、次は魔物で引き継ごう』

ゼリムが左手を挙げた。

「ゼリムさん…」

フリルもレナスも目を見合せた。そう…ゼリムは今まで自分が戦場に立ったり腹心の部下を同行させることはあれど、他の魔物を戦場に出す事はなかったからだ。

『星の危機なんだろう？、命を惜しんで戦力を涸ったとしても勝ち目は薄い…ならば我々魔の物は星の為…自らの為に命を掛ける…人間の為ではない』

ゼリムはそう言って口元を笑わせる。

『勿論、我々も協力いたしますよ』

アクエリアがにこやかに言い放ってエリオールは目を丸くする。

『わたくしたちが竜騎士の中に混ざれば、五神帝龍と言えど無視は出来ない…』

「ああ…成る程な…」

アルは笑い、エリオールは立ち上がる。

「ならばわたしはゲノムの親衛隊、及び聖騎士団を用い…」

「おっと、アレクセイの聖霊騎士団を忘れてもらっては困るな」

マールがその幼い顔を無邪気に笑わせ、立ち上がる。

「それに親衛隊だけになんてやらせるか！、ネビル・アグネシアの連合にも声を掛ける：一人でも多く戦力を集め：五神帝龍を倒す：もしかしたら敵は五神帝龍だけでは無いかもしれんしな…」

マールは顔をしかめてそう言うと言席に着く。

「ああ、破滅を恐れ恐怖に駆られた生き物は、奴隷に成り下がる…」

アルは頷くとため息を吐く。

「重要拠点はここだ：ここに奴隷共は殺到するだろうよ…」

『ふむ…』

するとエリオールが立ち上がり、ホワイトボードの前に行く。

「先制攻撃は竜騎士及び帝龍の皆さん…」

一とかいて竜騎士と書き。

「攻撃後、一斉に南下し…」

下に二とかいてゼリム姫と書く。

「魔物達の総攻撃で注意をそらしつつ、落とし穴に誘導」

下に三を書いて。

「わたしを含めた親衛隊、聖騎士団及び連合軍を落とし穴の後ろに配置し大砲や機銃による牽制を浴びせて落とし穴に落とし、罠にはめ……」

アルを見る。

「都会の爆弾を使ってアボンヌってか？」

エリオールは頷くと、マールを見る。

「マール王はゲノム城にて聖霊騎士団を率いて指揮をとって欲しい。」

マールは快く頷く。

「いいだろう……だがいいのか？僕は裏切って君の国を占領するかもしれないぞ？」

エリオールは首を横に振る。

「マール王はそんな汚い事はしない。わたしはそうおもいましたが……買い被りでしたか？」

マールは照れて頬を赤くする。

「あ！当たり前だ！！僕はそんなつまらない事はしない！！第一ゲノムを占領したところでフリルは手に入らん…いやごめんなさい…」

マールはフリルの横で修羅の形相になった都会最大のシスコンの視線と殺気を浴びて小さくなる。

「ふう…殺気だけで殺すところだった…」

「かっこつけんな！」

アルはいい仕事をした的な清々しい感じに言い放ち、フリルにどつかれる。

「だが聖霊騎士団は人間との戦いには精鋭だ、しかし人外との戦いも考えるとなれば話は別になる」

「その点は心配いらないよマール王」

エリオールは隣に無表情でたっている白髪の少女の頭を撫でる。

「フィフをゲノムに残していくからね…」

するとフィフは珍しく反応してエリオールを見上げる。

「ん？」

エリオールが首を傾げるとフィフはエリオールの上着の裾を人差し指と親指で軽く摘んで首を横に振る。

「…わたしも…エリオール様の…そばに…」

フィフは生まれて初めてのわがママを言う。エリオールとしては嬉しいのだが…

「フィフ…わがママは言わないでくれよ…」

「…やだ…」

「フィフ…」

「…拒否…」

「頼むよ…」

「……………」

フィフは次第に俯いて涙目になり、エリオールはその涙を指先で拭く。

「聞いてくれるね？」

「……………わかった」

エリオールはよしよしとフィフの頭を撫でると、フィフはエリオールの手を弾いて部屋から出ていく。

「すみません…とにかく此方の防衛にはフィフ、あと都会からキッド君、シャーク君、ミーシャさんの三名をお借りします」

『おい、わたしの子供達もこっちに配置するぞ?』

エリオールが驚いて目を向けるとゼリムは笑う。

『安心しろ、わたしの子供達は皆強いからな!』

【ドガン!!】―そこで扉が開かれて一人の女の子が入ってくる。

薄い赤茶色の髪の毛を頭の上で縛りちょんまげのように振る女の子は赤を基調とした学生服に背中には身体とは不釣り合いに長い長銃を背負っていた。

「…アヤカ」

それはフリルの義娘、10歳になったアヤカだった。アヤカはフリルのような勝ち気表情で歩いてきて机を叩く。

「あたしも戦うよ!」

アヤカの言葉にフリルの目が点になる。

「は…はあああ!!?」

フリルに言われてアヤカの唇が尖る。

「お義母さん!アヤカはもうレイブンだって使えるし学校の成績だって一番なんだよ?」

アヤカは灼色の髪の毛を振り乱して胸をはり、フリルは大きなため息を吐く。

「いいじゃないかフリル、頼もしいじゃないか」

エリオールは笑顔で呟き、アヤカも唸る。

「でも王様…」

エリオールは笑顔でフリルを見て、それからアヤカを見る。

「アヤカ、君にはこの町に敵が侵入するような事があった場合、敵の迎撃を頼むよ」

ようするにアヤカは戦地へは送らず、街中の護衛をする命令だった。フリルは頷き、アヤカは笑う。

「わかりました！」

ドンと胸を叩き、歯を剥き出しにして笑っていた。

そして：アグネシアによる最大の戦いの火蓋が、切って落とされようとしていた。

【The Beautiful World】（前書き）

よみがえった厄災：無能皇帝との決戦の準備は整った！フリル達聖騎士団はエリオールの旗の下で再びアグネシア全土を巻き込んだ連合を作りあげることになった。

今こそアグネシアと都会の総力をあげて退治する時！！…聖騎士団最大の決戦が幕を開ける！！！！

【The Beautiful World】

決戦の2日前、エリオール自らも鎧を身にまとい、アグネシア全体から集まった精鋭2800万人の大軍勢の前に立つ。

「諸君！！種族、人種、国家の隔たりを越え…ここに集まって頂いた事をまず感謝したい！ありがとう！今、この大陸は…否、この世界は五神帝龍の危機に瀕している。その力は強大…そして私一人の力はそれと比ぶべくもない…だが…だが、これだけの精鋭諸君がいれば必ずや五神帝龍を打ち破ることができる！！この戦いは生きて帰れるものは私を含めわずかしいだろう…だが…だが、このまま五神帝龍の思うままにさせて家畜のように餌となる未来を…そんな未来を私は受け入れることはできない！！諸君もそう思うからこそここに集ってくれたのだと思う！！」

そこまで言うときエリオールは懷から遺書を取り出し掲げ、決意を示すかの様にそれを引き裂く。

「だが…大陸の未来を考えてここに集ってくれた諸君だからこそ…私は生き残ってほしい！！共に五神帝龍を打ち果たしたあとの未来を支えてほしい！！出撃は明日…一人でも多く生き残れ！！まだ時間はある…皆、家族への遺言を書く時間を与える。そしてそれは我々ゲノム王国が責任を持って戦いの後に家族のもとへ届ける。しかし…それは渡すことなく諸君らが戦いの後に自分の手で引き裂いて捨てられることを私は望む！！」

軍勢からは地鳴りともとれる大きな歓声が湧き、エリオールはマントを派手に振ってそれに答える。エリオールは解散の指示を出して城の中に入ると、そのまま城の裏側に回り、独房から外に出る。裏

門のすぐそばには小屋があり、エリオールは小屋の扉をノックせずに開け放ち、中に入る。

「…！？…王様？」

小屋の中にはフィフが一人でいつもと変わらぬ様でいた…フィフはエリオールを見てその目を丸くする。

「フィフ…その…」

エリオールはフィフの前に行き、フィフの目線の高さに合わせて膝を折る。

「王様…お止めください…」

しかしエリオールは辞めず、フィフの両手を握り締める。

「王様？」

フィフは訳がわからずに首を傾げていると、エリオールはフィフと見つめあう。

「フィフ…この戦いが終わったら…私と結婚してくれないか？」

フィフはまた任務だと感じて頷く。

「違うフィフ、任務じゃないんだよ…」

エリオールは立ち上がると、鎧の子物入れから小さな箱を取出し、フィフに手渡す。

「？」

フィフは箱を手にしたまま首を傾げる。

「開けてごらん？」

エリオールに言われてフィフは頷き、箱を開ける。中には赤いルビ
ーが細かくあしらわれた指輪があった。

「……？」

「駄目かい……？」

フィフは息が詰まり、何かがこみあげてきて胸が苦しくなった。

「王……様」

声が出なかった……そして瞼が熱くなる。フィフは精一杯の嬉しさを
こめて小さく頷いた。

「よろ……こんで……」

フィフはどんな表情をしていたのか理解できない……ただフィフは心
から涙を流していた。何故泣いてしまったのかはフィフにも分から
ない。ただそれだけだった……

「フィフ……」

エリオールは小さなフィフの身体を力一杯抱きしめる……まるでその

温もりを永遠の記憶に刻みつけるように。

「…王様？ あ…あの…あっ！」

エリオールはそのままフィフを押し倒し、そっと唇を重ねる。そうして二人は寝屋を共にした。

「…王様…」

夜、フィフはエリオールに呟くように話しかける。

「ん？」

フィフはエリオールにしがみついて強く握る。

「死なないで…」

エリオールは少し考えるようにしてから、

「わたしは、国民のために命をかける…だから…死んだら後を頼みたい…」

フィフの表情が暗くなる。

「この国はまだ出来たばかりだからさ…」

「聞きたくない…」

フィフはエリオールにしがみつき力を込める。

「はは…そうだね…もうこの話は止めよう…」

「はい…」

二人は再び抱き合い、夜は更けて行った。

そして決戦の日、最前線…レナスは副座をフルールに取り付けていた。

「ファリス…今からでも間に合う…」

レナスは後ろで薙刀を構えるファリスに向けて放つ。

「姉様…わたくしは死ぬ為に行くわけじゃありませんから…」

「そうですよー！」

レナスが振り向くと、共に闘って来た乙女達が笑っていた。

「全く…」

そしてレナスは空を見上げる。

「行こう！！」

レナスの掛け声で竜騎士達は竜に跨る。

「竜騎士団隊長！！！レナスが命令する！！【絶対に死ぬな！！！！生きてまた会おう】！！！！」

レナスはレイブンの言霊で全員に命令し、竜騎士の乙女達は揃って声を張り上げ、空へと飛び立つ。そして数刻後に竜の山につき：

【戦闘開始！！】——レナスの掛け声と共に激しいラッパの音が広い荒野に響き渡る。

「確認！！！！」

隊列を為して空を舞う竜騎士の一人が声を張り上げ、レナスは重槍を構える。

「みんな行くぞ！！第一竜騎班！突撃！！第二竜騎班は我に続け！！！！」

レナスは声を張り上げ同時にフルプレートを降ろす。ファリスも真似をして愛用の薙刀を握ると、二人を乗せたフルールを先頭に竜騎士団は黒煙の中へと突入。まるで編隊が一個の生き物であるかのように統制をとって音速で急降下し、眠る巨龍の背中に向かって一斉に槍を投げ、一気に離脱する。

【ゴア！！ギアアアアアアアアアアア！！！！】

第一竜班と第二竜班の槍を全身に受けた五神帝龍はその巨大な身体を起こしてレナス達を睨む。

「退却！！」

レナスの一言で竜騎士達は列を成して退却していく。

『ねえねえ！逃げテクよ？』

『罨…』

『わな…？』

『でも…』

『喧嘩はかう！！皆殺しにする！！』

五つの声が響き合い、五ツ首の龍は七色の翼を広げて飛び立ち、その巨大な体では考えられないスピードで迫る。

「姉様！！追ってくる！！」

レナスはファリスに言われて、最後尾に目を向ける。

「第二竜班！！散開！！散々になって戦線を離脱せよ！！第一竜班は現状を維持！！ギリギリまで引き付けろ！！」

第二竜班は命令通りに散開を始める。

【ギャアアアアアアアアアアアア！！！！】

猛る五つの首から放たれる破滅の光は、散開し遅れた第二班の数人の乙女達を次々に焼き払う。

「く!!」

レナスは仲間の死を直視出来ずに目を背ける。

「姉様!前!!」

前?、誰もが思った、そこには遙か背後にいた筈の巨龍がいた。

「ヒロエの言っていた空間跳躍ですね…」

レナスは重鎗を鞘から抜き放つ。

「第一竜班散開!!!、リリム!ヒロエ!龍姫が前に出る!!!援護しろ!!!」

「了解!」

レナスの両翼に二人が並び、五神帝龍へと突貫する。

【ギャアアアアアアアアアア!!】

五つの巨大な首が猛り、口から破滅の光がレナス達へと襲い掛かる。レナスはフルールの手綱を巧みに操り、フルールは前に進みながら大きく回るようにそれをかわして巨龍の身体に肉薄する。

「きゃああ!!」

背後で数人の乙女が光の中に消える。そして新たな龍の頭が逃げ遅れた一人に迫る。

【ゴアアア！】

「はああああ！！」

赤い飛竜がその頭に体当たりを食らわせ、口から灼熱の炎を放つ。

【ギャアアアアアアアアアアア！！！】

大地が震える程の咆哮……しかし赤い飛竜に跨る乙女は怯まない。猛然と肉薄し、灼熱の炎を浴びせ続ける。そして騎手である小学生のように幼い乙女、リリムは叫ぶ。

「ヒロエちゃん！！」

途端に五神帝龍の下方から黒い竜が迫る。ヒロエは両脇に抱えた槍に自らのレイブンを【吸血液体】を纏わせ、五神帝龍の腹部に向かって投げる。槍が柔らかい腹に深々突き刺さると吸血液体が五神帝龍の内部に染み渡り、身体を蝕んでいく。しかしそれをまるで蚊に刺された程度であるかのように、全く勢いの衰えない五つの首がヒロエに殺到する。

「【私はここだー！！！！】」

レナスが叫び、五つの首の注意を自らに向け、その間にヒロエが離脱する。さらにリリムがグレイナルごと巨大な片翼に体当たりし、翼膜に風穴をこじ開ける。

【ギャアアアアアアアアアアア】

雄叫びをあげて五つの頭が翼膜に殺到し、破滅の光をリリムに放つ。

しかしリリムは冷静に翼膜に隠れ、五神帝龍は自らの力で自らの片翼を焼き払ってしまい、バランスを失う。さらにレナスがもう片方の翼に迫る。

「【地面に】！！ 【堕ちろー】！！」

レナスはフルールとともに加速し、背中のファリスが立ち上がる。そしてフルールの急停止により弾丸のようにファリスが打ち出される。

「やあああああああ！！！！」

虹色に輝くファリスが雄叫びと共に薙刀を振るい、五神帝龍の翼を削ぎ落とし突き抜ける。

【ギャアアアアアアアアアアアア！！】

両翼を失い落ちていく五神帝龍はせめてファリスだけでも…と一つの首がファリスに迫る。

「ファリス様ー！！」

リリムとグレイナルがファリスを空中でキャッチして素早く上昇する事でそれをやり過ごし、首は空を切って五神帝龍は地面へと落下する。

【ズウウウウン！！！！】——地響きを立てて地に落ちる五神帝龍…しかしすぐさま起き上がると空中のレナス達に襲いかからんと首を向ける。

「よし!!南下するぞ!」

レナスが叫び、三騎の龍は隊列を組んで南下を始める。五つ首の巨龍は地上を走ってそれを追跡し始め、再び空間の中に姿を消してレナス達の前に現れる。

【ギャアアアアアアアアアアア】―巨大な咆哮を挙げて立ち
はだかる五神帝龍：それぞれの首が鎌首を持ち上げ

「くう!!」

レナス達は手綱を引いてフルールを止める。それを見てチャンスと思ったのか、五神帝龍の五つの頭が三人に殺到する……しかし、レナスは笑った。

『水ヨ、渦ヲ卷ケ災厄ヲ洗い流セ』

水帝龍の美しい声が響けば五神帝龍のいた地面から濁流が沸き上がり、レナス達と五つの頭の間には水の壁が形成される。水壁は五神帝龍を取り囲み、レナス達は散々に散開する。

【ドオオ!】―首の一つが破滅の光で水の壁に穴を開け、逃げるレナスに首を伸ばす。

【ドオン!】―レナスを追う首にそうはさせじと地面から飛び出した巨大なワニのような龍：土帝龍・アブゾアジルがその大きな口で挟み、噛み付く。そしてその巨体で、ジャンプしながら横に一回転すれば…

【ブチン!!】

【ギャアアアアアアアアアアア！！】

土帝龍の奇襲で首の一つを失った五神帝龍はけたたましい悲鳴を挙げ、土帝龍はその隙に首を放り捨てて土の中に姿を隠す。

【ギャアアアアアアアアアアア！！】

猛り狂う五神帝龍は残った四本の首から破滅の光を放ち、水の壁を吹き飛ばす。

『ガアアアアアア！！！』

『キュオオオオオ！！！』

雄たけびと共に上空から二匹の帝龍：氷帝龍と炎帝龍が現れ、4000度を超える灼熱の熱線とマイナス4000度の氷線を放つ。五神帝龍の身体で二つの光線は核を思わせる大爆発を巻き上げ、遠くでそれを悠然とした少女が、草原には場違いな玉座に腰掛けて眺めていた。

『派手にやってるな！』

少女は小柄な体格に大きく真っ赤な瞳をどんぐり眼に見開いて笑っていた。美しく気品漂う青銀の髪が揺れる：いいところのお嬢様にか見えない彼女だが、彼女の頭には犬のような大きな耳、お尻にはフサフサとした綺麗な毛並みをした尻尾があり、彼女が人間では無いことを主張していた。そんな彼女の頭上を三騎の飛竜が南に向かって飛んでくる。

「ゼリムさーん！」

レナスが手を振り、ゼリムは手を振る。

『よくやった！！後は任せろー！！』

次第に大きくなる地面の振動、レナスの後を追うように巨大な龍達がゼリムの頭上を飛んで行く。

『お嬢様…』

ゼリムの隣で猫の執事、エデンが声をかけてゼリムは鼻で吐き捨てるように笑う。

『わかっておる…』

ゼリムは立ち上がり、息を吸う。

『よく聞くがいいきさまら！！』

ゼリムは地を黒くうめつくす程の魔物の真ん中にいた。

『今回の戦いは！我々魔族の住民がこの星でどんな生き物よりも優れている事を示すいい機会である！！！！、同時にこの戦いに敗れる事は世界の破滅を意味する！！、魔界に家族を残して来た者には悪い…命を掛けて！奴を仕留めよ！！…皆には悪いな、わたし1人は最期まで生き残ってしまうだろう…だが！我らフェンリル一族も！！魔界の王では無く、きさまらと同じ一族として己の存在の全てをかけて奴と戦う！！思い出せ！我らフェンリルは神に牙を向き！！そして勝利したのだ！！…奴は五神帝龍等という名前ではあるが

神ではない！！、これが何を意味するか分かるか？」

ゼリムは1人で笑う。

『この戦いは楽勝だ！我々に敗北なんてない！！』

そして迫りくる山のような龍を睨む。

『行くぞ！！我ら例え死しても、牙は折れん！！死したその時は……
ヴァルハラで会おう！！！！』

ゼリムの一声に様々な魔物が雄叫びを挙げ、五神帝龍へと突撃を開始する。

「ゼリム姫と魔物の軍勢が戦闘を開始しました！！」

最終地点にいたエリオールに弓が叫ぶ。

「よし、計画通りだ……」

エリオールは大きく頷いてアルに目を向ける。

「よし、特火部隊！ゼリム達を援護するぞ！援護射撃開始！！」

アルは背を向け、背後に並んだ巨大な大砲の群れに合図を送った。

【ギャアアアアアアアアアアアア！！】

五神帝龍は大地を揺さ振る程の雄叫びを挙げ、魔の軍勢を尻込みさせる。しかし軍勢の勢いはまるで止まらない……それどころか真っ赤

な稲妻がお返しと言わんくらいに帰ってくる。例え五神帝龍と云えど死の稲妻を前にすれば、ダメージは少なくとも痛みはある。そこで足を止めて見たこともない結界を張ることで死の稲妻を受け止め相殺する。その間にも大量の魔物は五神帝龍を取り囲み、五神帝龍よりも遥かに巨大なタコの化け物がその触手で五神帝龍を締め付け、大きな口で丸呑みにする。

【ボオオン！】タコの化け物は爆裂し土煙を巻き上げ、煙の中から四本の首が姿を現すと破滅の光が迫る魔物の波を消し去り、足を止めさせる。すると今度は魔物達の中から十四本の尻尾を携えた巨大な猫が飛び出してきて四本の光をしなやかにいなして避けながら、五神帝龍の下に潜り込む。それに続かんとタコの化け物の破裂に一時止まった魔物達は再び歩みを刻む。

『狂い踊れ：【乱れ歌舞伎】』

下に潜り込んだ猫の十四本の尻尾が五神帝龍の身体を縦横無尽に切り刻みながら突き進む。

【ギャアアアアアアアアアアア！！】

瞬く間に魔物の海に吞まれた五神帝龍は、足で、尻尾で破滅の光で魔物の海を蹴散らしていく。

『ガアアアアアア！！』

何処から現れたのか、巨大な青銀の狼が一つの首に食らい付く。

『イツカノ礼ダ！！』

【ブチン!!】

ゼリムは四本の首の一つを食い千切り、素早く離脱する。

【ギャアアアアアアアアアアア!!】

三本になった五神帝龍の首はゼリムに殺到する。

【ドオオン】―その一瞬の隙を突いて象やサイ等といった魔物達が五神帝龍に体当たりを食らわせ、小さな魔物達が一斉に五神帝龍の身体に殺到する…あるものは噛み付き、あるものは爪が無くなるまで切り裂き、あるものは暴れ、あるものは火を、あるものは十四の剣を使い、五神帝龍を一気に追い詰める。五神帝龍はたまらず魔物達を無視して逃げるように真っ直ぐ南に向かって走って行く。

『追うな!』

ゼリムの命令で五神帝龍に取りついた魔物達が離れ、同時に五神帝龍は報復の為に振り替える。

【シュウウウ】

そこに風を切り裂きながら何かが飛んでくる。

【ドオオン】―同時に弾け飛ぶ二本の首、残った一本の首は目を丸くして背後を見つめる。数十キロメートル先に見える大砲の列をみつけ…

【ギャアアアアアアアアアアア】

怒りの限り猛る巨龍は足を動かして魔物達を無視して突き進む。

「アル！かかるぞ！」

五神帝龍の足がエリオール達の陣地から僅か数キロの位置を踏みしめたその瞬間：脆い地盤が碎け散り穴のなかに身体が沈む。

「VX部隊！一氣に決めろ！！、ウィプルの魔法使いは祈祷を開始！」

上空から穴に填まった五神帝龍の身体に降り注ぐミサイルや爆弾の雨が五神帝龍の身体を徹底的に叩きのめし、次第に残った一つの頭が力を失って地面に崩れ落ちる。

「では皆さん…」

ウィプルからゲノム城に集められた魔法使い達が五神帝龍の模型の周りを取り囲み、祈祷を始める。すると本物のまわりを光の陣が囲み始め、封印術式が完成してゆく。

「いやったー！！！」

騎士の誰かが声を挙げる。

「まだよ！」

フリルが声を張り上げ、正面を睨む。

そこには5人の少女が立っていた。

『全く…やってらんないよね…何よあんた達』

赤い髪くっきりした目の少女が前に出てきて余裕な笑みを浮かべる。

『ルウ…早くしないと、封印される…』

ルウと呼ばれた赤い髪の少女に、背後の肩まである青い髪の無表情な少女が声をかける。

『分かってるよサレ、ならどうする？』

綺麗な黄色い髪の毛にドレス、一見お嬢様のような少女は強気な視線をサレに向け、その横で猫耳を着けた黒髪に一見男の子にも見えるラフな格好の少女は大欠伸する。

『二手に分かれよーぜー？』

そう話をすすめる5人の少女の背後には竜に手足を生やした二足の不思議な生き物達が現れ、少女たちに突き従うかのように隊列を整えていく。

「!？」

その数は数千、数万を超え、広い草原を黒くうめつくし、ゲノム王国軍を圧倒する。

『じゃ…わたしとサレとミウでこの奴ら潰すから、アイとハルはお城の方をたたきつぶしてきてよ!』

ルウは元気いっぱいに答え、手が空間に入り込むと、次元に歪みが

生まれ、ゲノム王国な正面が移し出される。

「あいつが！」

「行かせない！」

フリルがそのやり取りをみてはすぐさま飛び出し、フリルに合わせて聖騎士団も飛び出す。フリルは弾丸のようにルウに飛び掛かるが、ルウの前に青い髪の手が立ちあがる。

「く…」

『そんなに焦らなくても…』

慌て足を止めたフリルの顔面に突如目の前に現れたルウの手が打ち込まれる。

「ぶ！」

フリルはまともに拳を受けると、吹き飛ばされて地面に転がる。

『あんたはあたしが処刑したげるって♪龍の神子？』

フリルは起き上がり、ルウと向き合う。

「隊長！！」

マリア達が援護に向かって来るが、竜モドキの兵隊に阻まれてなかなか近付けない。孤立したフリルを尻目に、ルウの背後の次元の歪みの中にハルとアイが入って行き、竜モドキ達が半数そのあ

とに続く。

「エリオール、お前は兵隊たちを連れて城に戻れ。」

アルはジャージの上着を脱ぎ捨てて腕を交差させて身体を伸ばす。

「アル！…だが…」

アルはにやりと笑って、

「ここには聖騎士団とゼリム達に竜騎士団…それにこの俺がいるんだぜ？　もしれならおまえらは手薄な城を守るのが相場だろ？」

エリオールは大きく頷くと馬に跨り。

「一部の部隊を残し！我々は城に向かった部隊を迎撃に向かう！皆わたしに続け！！！」

エリオールを先頭にアグネシアより集められた兵は城へと引きかえそうとする。

『行かせるな…』

サレは素早く状況を察知し、竜モドキ達を向かわせ、自らも走りだす。

『ところがな！そこで我々が邪魔をする訳だ！！』

サレと竜モドキ達の行く手を阻むように、犬耳を生やした少女が背後に魔物の大軍団を従えて笑う。

【ガン】―強烈な打撃音がこの戦いのゴングとなった。素早く飛び出したゼリムのパンチが、魔物の大軍団をみて一瞬判断を躊躇したサレの顔面を完璧に捕らえて殴り飛ばす。主の奮戦をみるや、意気の上がった魔物の大軍団が竜モドキ達を取り囲んで襲いかかる。

「皆さん!!」

その上空を竜騎士団が舞い、帝龍が現れ、竜の兵隊たちを尻ぎ払う。

『この兵隊たちはまやかし、どこかに兵隊たちを造り出している精霊がいます!』

アクエリアの透き通るような声が全員の頭に響く。

『あーあ…あいつミウの事ばらしちゃって…』

ルウはフリルと向き会ったまま笑みを崩さずにフットワークを刻み始める。

『でもいっか、どのみちあんたはあたしが処刑する訳だからー!!』

ルウはフリルに向かって駆け出してくる。

『聖騎士団!!』

ゼリムが叫ぶ。

『フリルなら心配いらん!この鬱陶しい連中を製造しているバカ者をぶっ飛ばしてこい!!』

ゼリムに言われ、聖騎士団副団長、グリフォードは頷く。

「行こう！、我々の力を見せるとき！！」

そして8人の精鋭は、真っ直ぐに敵陣の中に切り込んで行く。

『あははは！お留守お留守お留守！！！』

フリルはルウの攻撃をかわす事に専念していた。

【ドゴオ！】

「く！！かはっ」

フリルのわき腹に、次元を突き抜けたルウの拳が突き刺さり、フリルは肺の空気を吐き出して怯み、下がる。

『ほら右右右！！』

同時にフリルの右頬をルウの拳が貫き、フリルは右向きに回る。

『ネンネは速いよお！？』

ルウはその間にもフリルとの間合いを詰め、最早抵抗のないフリルに乱打を浴びせ、地面に叩きつける。

「く…うつ…」

『なーんだよっわー！』

ルウはフリルの胸ぐらを掴んで身体を起こさせて笑いながらフリルの腹にボディブローを食らわせる。

「あぐっ!!」

フリルは胃の中の物を吐き出しそうな嘔吐感に襲われて前のめりになる、しかしルウの左フックがフリルの顔面を捕らえて右へと払い、そして右ストレートがフリルの顔面を捉え、一切の反撃すら許されぬままフリルの小さな身体が飛んで行き、地面を転がってうつ伏せになる。

『まゝこの程度だよねゝゝさ!、お楽しみたーいむ!』

ルウはキラキラ瞳を輝かせながら竜の兵隊たちを支持してフリルを仰向けにし、両手足を掴んで持ち上げ、足を開かせる。

『神子の串焼き〜♪』

ルウは兵隊の1匹から槍を受け取ると、真っ直ぐ槍を構え、フリルの下着に這わせ。

「はい、ストップ」

ルウは気付いた時には横にいた男に目を向ける。

『え?』

ルウは目を見開いて動揺し、男から飛び下がる。

「フリルを離しな」

男は竜の兵隊たちを瞬く間に地面に寝かせてフリルを抱き上げ背中をたたく。

「ん…」

「大丈夫か？」

「お…お兄…ちゃん？」

動揺で目を丸くしているフリルにアルはニヤケる。

「やいフリル、あんなザコ相手になに苦戦してやがる」

『ぎ!?!?…ザコ!?!?』

アルはルウなど見てすらない。

「ち! ちょっと油断しただけよ!」

ボコボコにされていたはずのフリルは直ぐに敗けないように胸をはる。

「ま、お前はゼリムなんかの援護をしてこいや、おれがあのだザコやつつけどくからよ!」

アルは白い歯を光らせて笑い、フリルはムツとする。

「あたしがやるよ!」

じたんだ踏むフリルの両肩を叩く。

「お前がやったらあんなザコ5分程度だろ？」

『あんたなんて3分だよおお!!』

じたんだを踏むルウ等最早空気と言いたいように、ゼリムの方を見る。

「あっちのサレって娘の方が可愛いし強いだろうから、フリル！ゼリムを助けて来なさい！」

『さ!…サレに敗けた!!!? あたしサレに敗けたの!!!?』

アルはそういつて笑顔でフリルを回して背中を押し出す。フリルは不満そうにしながらもサレの方へ走って行った。

「さ、て、と…」

『散々愚弄したわね…いいわ? みたところ人間みたいだし? あんたなんかじゃわたしに指…』

その時、手の平がルウの顔面に直撃し、ルウの体は木に向かって叩き飛ばされていた。

『ぶ…え!?!?!?』

【ドン!】

ルウの身体は木にぶち当たり、跳ねるように地面に叩きつけられる。
アルはそんなルウを見下ろして笑う。

「なんだよ、片手で充分じゃねえか…」

アルは小さなため息を吐き、ルウは怒りで立ち上がる。

『お前えええ!!!』

爆発を思わせる勢いでアルへと駆け出すルウ。

『あはは!!! 良く一発浴びせたね? 褒めてあげるでもね? あたしに
レイブンなんてちゃちなものは通用しないんだ…よ?…』

ルウは黄金の眼を見開いて笑みを無くす。偽りであるはずのアルの
力は、総て本物だと現れているから…。

「なに言ってるの? お前、おれは何処にでもいる【一般人】だぜ?」

アルは最早笑っていた。

『だ!!! だからどおしたあああ!!!』

逆上したルウは真っ直ぐ突き進み、アルの突き出した拳が顔面に突
き刺さる。

『ぶー!』

ルウはアルの拳に叩かれて地面に仰向けに倒れる。

アルは容赦なくルウの顔面を踏みつけ、グリグリとなじる。

『いぎ!!!こ!!!こい!つ!!!』

ルウの右手が次元の歪みに吸い込まれ、アルの後頭部に迫る。

「はい、予想どおり」

アルは右手を掴み、思いっきり引っ張りながら踏みつけていく。

『いぎ!!!いぎぎぎ!!!』

ルウは左手でアルの足をペシペシ叩いて頭を退けようとする。アルは足を退けると、両手でルウの右手を掴み、そして思いっきり引っ張る。

『うぎゃあ!!!』

地面のルウが次元の歪みに引きずり込まれ、アルの背中に降り注ぎ、そのまま地面に叩きつけられる。アルはそのまま肘に手を這わせ、一方は引っ張り一方は押す。

【バキィ!】

『ぎ!!!!きゃああああ!!!!!!』

ルウは右腕を押さえてのた打ち回る。

「なんだ?、テメえらがやった事はんな程度の痛みじゃすまねえだろ?」

アルは歩みより、足を踏み潰す。

【ボキィイイ！！】激しい骨折の音とルウの悲鳴が草原にこだます。

『はひゅ…はひゅう！…は…』

ルウは必死にアルから逃げようと片手で身体を引きずって離れていく。

「おや？何処に行くのかな？」

アルはルウの脇腹を蹴りあげ、ルウは転がって仰向けに仰け反る。

『ひ…い！』

アルはニコニコしながら歩み寄り、ルウの頭の上に足を振り上げ。

「人間舐めんなよ？くそ虫野郎…」

【ドグシャ！！】

振り下ろされた足がルウの身体を叩き潰し、ルウは青い光になって散っていく。

「んん！！」

ルウの死は五神帝龍の全てに痛みとして知らされる。

アイは頭を押さえていた。

『ルウ：一番強いとか自慢してたくせに：一番最初に死んでるんじゃないわよおお！！』

アイは両手を広げれば、空間に穴が開き、様々な武器がまるで雨のようにゲノム王国の城壁に降り注ぐ。

【ドオオオン！！】激しい爆発が城壁に大穴を開け、そこにアイの部隊が傾れ込む。

「わあああああ！！！！」

城壁の中から、沢山の兵士が溢れ出てきて竜の兵隊たちと正面から打ち合いを始め、アイはそれらを無視して街に侵入する。

「全く、楽勝じゃない…」

「はあっ！！」

呆れていたアイの前に、突如白髪の少女が飛び出し、少女は右手の剣をアイの頭に振り下ろす。

『！？』

アイは咄嗟に身体を反らせて少女の一撃を避け、多様に見えた。

『ぎゃあああ！！』

少女の一撃は、アイの顔を真っ直ぐに浅く切り裂き、アイは顔を押しさえて後ろに下がり、少女はアイに向かって進む。

『て、めえええ!!!』

アイは右手に長剣を作り出し、少女の一撃を受けとめて振り払う。

「ん!…」

少女は剣で弾かれたただけにも関わらず、吹き飛ばされて手の痺れに表情を歪める。

『よくも!!! よくもわたしの顔を!!!!!!』

アイは自らの顔を傷つけられた怒りで咆哮を挙げ、少女に向かって走りだす。

『殺す!!! ブツ殺してやるよ!!! テメエ!!!!!!』

少女は両手を地面に着き光の中から剣を引き摺りだし、アイに向かって行く。

「ミーシャさん!!! 今です!!!」

少女は上に向かって叫び、アイの注意が一瞬それる。

「はああああ!!!」

『なあってね!!!!!!』

アイは舌を出しながら剣を少女に振り下ろし、少女は二本の剣を盾に受け止めようと…。

【バシャアー!!】アイの剣は少女の二本の剣を紙屑のように切り裂いて、少女の身体を斜めに切り下ろす。

「ぐう!…」

下がる少女。

【ドン! ドンドン!】さらに少女の腹部に槍が三本突き刺さり、少女は口から血を吐き出しながら飛んでいき、建物の壁に激突してうなだれるように動かなくなる。

『ザコが…』

アイは吐き捨てるように呟き、少女に背を向ける。

【ドン!!】途端に、アイの身体を衝撃が突き抜け、アイは腹部を見下ろす。そこには突き抜けた槍があった。

「雑魚じゃ…ない…」

『て…めえ…』

「フイフ…」

フイフは口の端から血を吹きながら腹部に刺さった二本を引き抜き、引き抜いた槍を二本の剣に変える。

『ブツ殺す…』

アイは弾けるようにフイフに迫り、フイフはそれを迎え撃つ。

「はああ!!」

『オセエよ!!』

振り上げたフィフの腹にナイフが突き刺さり、アイはフィフの顔面をけりとばし、壁に叩きつける。

『全身!!滅多刺しダアアア!!!!』

アイは次々と剣をなげ、フィフは急所に刺さらないように剣を振り回す。

【ドズン】太ももにナイフが刺さり、右肩にナイフが刺さり、左肩をナイフが擦り、腹に二本のナイフが突き刺され。

「く!…」

フィフはひるまない。

『!!!』

アイが目を見開く。

「うううううー!!!!」

痛みを堪えながらのフィフの一撃がアイの腹を横一文字に切り裂く。

『むっかつくんだ…テメエエエ!!!!』

アイはフィフの腹に突き刺さったナイフを掴んで槍に変え、フィフの身体を蹴って引き抜く。

『シィネエエ!!!!』

よろけたフィフの心臓めがけ、槍を伸ばす。

【ドン】 槍はフィフの胸を貫き、フィフは槍を掴んで苦痛に表情を歪めながら、左手に握られた銃をアイの身体に向ける。

『え?』

【ガンガンガンガンガン!】

フィフはアイの身体に何発も弾丸を打ち込む。

『い!!!! てええ!!!! めええ!!!!』

アイは血塗れに成りながらフィフを引き摺りながら壁にフィフを叩きつけ、フィフの傷口を左右に抉る。

「うぐ!!!! ああ!!!!」

フィフは傷口を抉られて痛みで槍を両手で掴む。

『生意気ナンだよ!!!! クソの癖に!!!!!!』

アイはフィフの両手足に剣を突き刺して磔にし、胸を貫いた槍を抜いてはフィフの身体を何度も何度も突き刺した。

「あ…っ…!!」

フィフは意識を失ってうなだれる。

『オラ!! 何寝てんだ!! まだ終わっちゃいねえんだよ!! ころあ
あ!!!!』

「そこまでだ!!」

背後から声が響く。

『あん?』

アイは背後の声に向かって槍を投げ、槍は声の主の身体を突き抜ける。フィフは見てしまった。槍に貫かれた声の主は…。

「い…いやあああああ!!!!!!!!!!」

フィフが今までに無いほどに声を張り上げ、両手足を自らちぎって地面に落ちる。しかし直ぐに両手足が再生し、アイに向かって身体をぶつける。

『て! めえ!!!!』

「殺ス…」

フィフは怒りで瞳を真っ赤にしてアイの胸ぐらを掴み、自分が磔られていた壁に向かって投げつける。

『てえな!!!! ザコの癖…』

【ドドドン】瞬き寄りも早くアイの身体を剣が貫く。

『ガブ……て！めえ……』

フィフの身体中足元、全てが剣へと変わり、アイの身体に降り注ぐ。

『ぎゅ！！：：いい！！！！？』

降り注ぐ剣はアイの身体を滅多刺しにして刀の山になる。

「死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！」

ファイフは怒りが続く限りアイの身体を粉々に砕き、アイは青い光になって散る。

「エリオール様!!!」

ファイフは慌てエリオールに走りよる。

「ファイフ…」

「エリオール様！今すぐ手当てお…」

しかしエリオールはフィフの胸に手を置いて制止する。

「いい：間に合わないさ：」

エリオールはそのまま仰向けに寝そべり、槍を引き抜く。

「フィフ…」

フィフはエリオールの頭を膝に置く。

「ここにいます…」

「わたしは…ダメな王だったかい?…」

エリオールは苦しそうな素振りを見せず、笑顔で呟いた。

「いえ…立派でした…」

「そ…うか…」

エリオールは口から血を吐き出し、目を開いてフィフを見つめる。

「フリルに…伝え…てくれ…この国を頼む…と…いいね?…フィフ…」

エリオールはそれだけ言うと、一度息を吸い込みもう呼吸することは無かった。

「……エリオール…様…」

フィフは呆然とエリオールを膝の上に載せたまま、静かに泣いていた。

その背後に竜の兵隊たちが迫る。

「…お前たちが来なければ…」

フィフはフラフラと立ち上がると、全身を銀色に輝くエーテルが怒りの業火と共に燃え上がる。

「オーバードライブ…【50】…」

フィフの身体に触れる全て、空気、石、砂、全てが武器に変わり、一方的な虐殺を始めた。

『アイもルウも死んだー…おらはさいごまで…』

【ドン！】ハルの身体を、一発の弾丸が貫いた。

『むああ！！？』

ハルは腹を押さえて地面に横たわる。

「よっしゃ！！」

物陰からハルを撃ち抜いたアヤカが飛び跳ね、その後ろにいた二人の少女がアヤカの服を引っ張る。1人はセミロングの髪の毛をポニーテールに結んだ東洋系の少女、如月エーコは右手に東洋の剣、刀の鞘を掴む。

「アヤカ…まだ仕留めてないかもしれないよ？」

エーコはアヤカの服を掴んでしゃがませようとする。

「大丈夫だって♪、ね？」

アヤカはもう一人の女の子に笑いかける。女の子はおかっぱのサラサラとした黒髪に丸い眼鏡、体格は二人寄りも二周り程小さく見かけは東洋の人形に似ている。名はサラ。サラはきめの細かい黒い髪を振り乱して、笑窪を作ったまま。

「まだ…」

小さく消え入りそうに囁いた。サラは手に握り締めた黒い辞書を強く握る。

「え〜♪？、でもあいつ動かないし…」

「違う…様子を伺ってるだけ…」

「ならもう一発打ち込む？」

そう言ってアヤカは再び小銃を構える、しかしそこにはもうハルの姿はない。

「バレた」

『ハッハッハー！！！！』

サラが眩き空を見上げ同時にハルがアヤカ目がけて降ってくる。

「【花鳥風月拔刀・銀風】！！」

エーコは素早く切り替えて左手で柄を握りしめ刀を鞘から振り抜けば、七つの銀色の輝きがハルに向かって迫る。

『きっかーん!!』

ハルは銀色の輝きを両手で弾こうとする。すると銀色の輝きはしなり、変幻自在に姿を変え、ハルの身体に巻き付いてハルの身体を拘束する。

『な!! ワイヤー!?!』

「架かったよアヤカー!!!」

アヤカは対戦車ライフルを取り出す。

「でかした! エーコ偉い!!!」

【ドオン!!】アヤカは対戦車ライフルを容赦なく発泡し、吐き出された大きな弾丸は空中でワイヤーに絡まれ藻掻くハルの上半身をぶち抜いて血飛沫を飛ばす。

「いやったー!!」

「やったー!!」

二人は飛び跳ねてハイタッチする。

「っ! 二人とも!!」

いつも無口なサラが血相かいて怒鳴り、エーコとアヤカを今までに無いほどの力でひく。

「うわ！」

「わあ！」

アヤカとエーコはサラの後ろに投げ出され、同時にアヤカとエーコのいた場所が陥没して崩れ落ちる。

【ドオン！】激しく爆裂すれば、建物は粉々になる。

『感のいーやろーだなー』

ハルは黄金の眼でサラを睨み、サラも黄金の眼でハルを睨む。

『！？』

ハルは目を見開き、そして歯を剥き出しにして笑う。

『そーかー…おめーはこの前ブツ殺して食って闇帝龍の末裔か？』

サラは歯を食い縛る。

『そうだ…我が一族の怨み…貴様の死で払ってくれる…』

サラの両手が長い服の中に吞まれ黒色の光の剣が現れる。

「さ！サラ？」

エーコは身を乗り出し、サラは二人に振り返る。

『今まで黙ってて…ごめん』

サラはどこか寂しそうに囁いてから、下のハルに向かって飛び掛かる。

『死ぬ準備はできたかー!?!?』

ハルはその細い腕を振るう。

『貴様を殺す準備はできた!?!』

サラの両手をハルは右手で押さえ込み、払い退け左手はサラの胸ぐらを掴む。

『闇よ…全てに暗闇と暗黙の…』

『おそおおい!?!?!』

ハルはサラの身体を地面に叩きつける。

『がはあっ!?!』

サラはもろに背中を地面に叩きつけられて跳ね上がる。

『弱ええ!?!』

ハルは怪力で握りしめた腕をサラの身体に振り下ろす。

『ち!父上!?!』

サラは目を背ける。

「【花鳥風月拔刀・桜花】！！！」

一枚の赤い花卉がハルの身体に襲いかかる。

『ぬあ！？』

ハルは振り上げた腕で赤い花卉を振り払う、しかし赤い花卉は払われた瞬間に細かい花卉となり。

「かかったね！【乱れ桜花】！！！」

『ぬ！！なあああ！！』

ピンク色の細かい斬撃にハルは全身を切り刻まれ、血液を飛ばす。

『エーコ！？』

「あたしもいるよお！！！」

アヤカは怯むハルの身体に対戦車ライフルの弾丸を浴びせる。

【ダウン！】激しい轟音と共に吐き出された弾丸がハルの身体を地面に倒す。

「友達を捨てて！！何が騎士かー！！！」

エーコがハルに対して追撃に走りだし、アヤカはハルの身体に砲弾を浴びせる。

『ちよおしに！のるなあー！！』

アヤカの攻撃を対して鋼のような両手で守りながら立ち上がる。

「はああ！！」

エーコの振り抜いた七つの刃がハルの身体を切り裂く。

「【花鳥風月奥義・刀神囁雨もどきいい！】」

立て続けに振り下ろされる雨のような斬撃に似せたワイヤーが降り注ぐ。

『きいかにゃああ！！』

ハルはその全てを薙はらい、裏拳をエーコに放つ。

「エーコ！！！！」

「【闇よ、全てに暗黒と暗黙の暗闇を】」

途端にエーコの身体が闇に包まれ、ハルの裏拳は空を切る。

『闇帝龍！！』

『違うな…五首の災厄、わたしはサラ…』

闇が消し飛び、エーコが現れる。

「サラ！」

「サラ!!」

エーコとアヤカはサラを見て笑い、サラは笑顔でうなづく。

「援護します、倒しますよ!!」

「了解!」

アヤカは小銃を構え、エーコは前に飛び出す。

『あまあまーい!!』

ハルは右手を振り上げる。

【ドウドウドウ!】アヤカが放った銃弾がハルの右手を撃ち抜き、タイミングを後らせる。

「はあ!!」

その間にエーコの抜刀がハルの胸を×字に切り裂く。

「避けなさい!!」【シューティング・レイ】!!」

サラは両手で闇を溜め、真っ直ぐ伸ばし、エーコは飛び上がる。

『なああ!!』

ハルはエーコを眼で追いかけてしまい、サラの闇の光線に貫かれ。

「たああああ!!!!」

エーコはハルの背中を切り捨て。アヤカは頭に向かって銃を向ける。

【ドオン!】アヤカの弾丸がハルの頭を打ち抜き、脳髓を後頭部からぶちまける。

「勝った!!」

『ぬあんてにゃあ!!!』

ハルは向き直り背後のエーコに肘を振るう。

【ドオン!】エーコは咄嗟に刀を盾にするも、刀がひんまがり、エーコの身体に肘が当たると。そのまま振りぬかれ。エーコの身体が弾丸のように壁にぶち当たり、地面に倒れて血が水溜まりのように広がる。

「エーコお!!!!!!」

アヤカの悲鳴。

『呼んでるひまあるん! かあああ!!!!!!』

アヤカ目がけ、振りあげたアッパーがアヤカの腹に襲い掛かる。

『危ない!!!』

アヤカの身体を突飛ばし、サラは身代わりになってハルのアッパーを腹部にうけ、サラの背中をハルの腕が突き抜ける。

『じゃまだあゝこいつ!』

ハルはサラの身体を振るってサラの身体を地面に投げ捨て、サラは地面を転がり、血液の水溜まりが広がって行く。

「サラ!! エーコ!! うわああああ!!!!」

アヤカは小銃を撃ちまくりながら突撃する。

『でしゃばるな』

ハルの張り手で小銃は軽々とひしゃげて飛んでいき、アヤカは地面に尻餅をつく。

『さあ、つぶれなあー?』

しかしアヤカは逃げない。

「あんたなんて! お義母さんが!」

【ドオオン!】

ハルの片腕が、何もない地面を碎いた。

「やれやれ…息子に面白いから来てみる…なーんていわれたから来てみたら…面倒な事になってるじゃないの…」

アヤカの身体は大分離れていた。そのすぐ隣で、赤く装飾だらけのマントをあたまから被った。貴族のご婦人のような女性がその場に

背中を向けて立っていた、女性は豊かな胸元が開けた挑発的で大胆な深紅のドレスに深紅の手袋、深紅のタイツに深紅のハイヒール、全身を深紅に包んでいた、髪の毛は高貴な金色に輝き、その腰の両側には拳銃の引き金の付いた二本の剣が吊されていた。

『なんだあ？お前…』

「シャラップ！口の聞き方に気を付けろ貧乳猫！」

『ひ！！…おらの気にしてる事を！！！！』

逆上したハルは全身に血管を張り巡らせ、四つんばいになる。

「ペッタン猫の方がこのみかな？…いや、まな板か…」

『うなああああ！！！！』

瞬きより早く飛び掛かるハル、その早さはアヤカでも肉眼では追いつけられないだが。

【ドズン】地面に沈んだのはハルだった。ハルはうつ伏せで、この正体不明の貴婦人のハイヒールで足蹴にされている。

「グッジョブ！！アヤカ！！コレ程の相手によくぞ立ち向かった！！義理であったとしても流石は我が孫！！立派だったぞ！！」

正体不明の貴婦人はそう言ってハルの頭を軽く爪先でこづく。

『ぬあああ！！！！』

ハルの身体が面白い位に前の酒場に向かって飛んでった。

「孫…て、いう事は…!!」

そこに居たのは他でもない。この貴婦人こそ、フリルの母親…ヴァネッサ・フロル出会った。

『ねあああ!! 人間のくせにいい!!!!』

ハルはだっ子のような事を言いながら飛び上がり、ヴァネッサを睨む。

「五神帝龍なんてたいそうな名前じゃないか、貴様が五神帝なら!! わたしはゴッドマザーだあ!!!! アッハッハッハッ!!!!」

ヴァネッサは戦いの時のテンションは常に最高潮である。

『ふざつけるにゃあああ!!!!』

地面に足を叩きつけ爆発のような勢いでヴァネッサに迫る。

「【嘆きを挙げろ! マリーメリー!!!】」

ヴァネッサは目にもとまらぬ早さで腰の二本を抜き放つ。碧く輝く刃は、太陽の輝きを受けて高貴な光を放ち、金色で加工された引き金を引く。

『なああ!!!』

振り下ろされるハルの腕、背後に回っているヴァネッサ。

『なあ』

【斬】 ハルの背中が十字に切り裂かれ、ハルは地面に落下する。

『うなああ！！なあああ！！！！』

ハルは地面をのたうち回り、身体を転がして地面を血液でべったり汚す。

「くく、厄介な再生は封印してやったぞ？、さ、どうする？どうする？」

災厄を目の前に、青い瞳を輝かせて笑う深紅の貴婦人、アヤカは思う。本当の災厄はこの人なのではないかと。

『ぐあああ！！！！』

油断していたアヤカにハルは手を伸ばす。

「成る程、三下がやりそうな事だな」

ハルの両手はアヤカには触れなかった…何故なら。

ボトボト…ハルの両手は肩から削ぎ落とされていたから。

『うみゃあああああ！！』

「うるさい、飽きたから死ね」

ヴァネッサはハルの首を削ぎ落とす、ハルの身体が青い輝きに包ま

れて消える。

「大丈夫かアヤカ」

ヴァネッサは腰を抜かしたアヤカに手を貸し、アヤカはヴァネッサの手を借りて立ち上がる。

「そうだ！！サラ！！エーコ！！」

アヤカは慌てサラとエーコに駆け寄る。

「エーコ！エーコ！！」

「ん…あやか…？」

エーコは僅かに目を開いてアヤカを見る。

「大丈夫？」

エーコは泣き出しそうになりながら呻く。

「身体中痛いよお…」

「骨が何本か折れて内臓が破裂寸前なただ、死にはしないわよ！泣き声言うな！立ちなさい！」

ヴァネッサは関係無さそうに痛がるエーコを起こす。

「うう…サラは？」

辛そうなエーコはちだまりに沈むサラを見つける。

「サラ！！」

アヤカはサラに駆け寄り、小さなサラの身体を起こす。

「サラ！！サラ！！お願い目を開けて！！」

「馬鹿だなアヤカ、こいつらは頭と心臓を潰さなきゃ死なない程にしぶといんだ…ほらどけ」

ヴァネッサは涙ぐむアヤカを蹴飛ばし、サラの頭を爪先で蹴る。

「いた…」

先程まで身動きしなかったサラが頭を押さえて上半身を起こす。

「サラー！！」

アヤカは更に飛び付いて泣き出す。

「ほらおまえら！泣いてる暇はないぞ！！」

空気を読まないヴァネッサはゲラゲラ笑いながら手を叩く。

「う…何処へ？…」

ヴァネッサはエーコに剣先を向けて引き金を引く。

「【ヒールショット】」

ドン！とエーコの身体をヒールショットが跳ねとばし、エーコは地面に倒れる。

「ちょー！！ヴァネッサさん！」

「何をしている！さっさと立て！アヤカ！武器を取れ！！敵はまだいるのだぞ！！」

ヴァネッサに言われ、アヤカは漸く雰囲気を読み込むと、エーコもサラも立ち上がる。

「楽しい楽しいゴミ掃除だ！！ゆくぞおまえらー！！アハハハハハハハ！！！！！！」

ヴァネッサは笑いながら走って行く。

『つ…』

メイド服の少女は眉間を押さえる。

『ルウ、ハル、アイ…』

そして少女は再び目を閉じた。

「オラオラオラアアア！！」

白銀の鎧が草原を爆走し、目の前に広がる龍の兵隊を跳ねとばして

いく。

「マリア！！一匹行った！！」

「【スパイラルエア】」

竜巻の槍がマリアの腕から飛び出し、龍の兵隊達を貫いていく。

「ギリ！！」

「任せろ…【花鳥風月抜刀・斬斬風】」

右で握りしめ、振り抜いた刀から放たれる斬撃の風がカリスの前を塞ぐ龍の兵隊を斬り崩し、前へ前へと駆け抜ける。

「ガハハ！若者ばかりに格好は付けません！！！」

「アドレーさん！！行きますか！！」

ラルフはそう言って振り返り、追い掛けてくる敵の群れに飛び込む。

「ガハハ！！おうさ！！」

アドレーも後を追いつける。

「ラルフ！？アドレーさん！？」

ラルフはグリフォードに向かって叫ぶ。

「グリフォード！押さえとくからさっさとやっちまえー！」

「若造！頑張れよおおー！」

二人は敵陣の真ん中に入っていく、一瞬で取り囲まれる。

「おおお！！！」

アドレーは巨大な剣を振り回し、龍の兵隊を次々と斬り倒していく。

「ぶっ飛べー！！！」

アドレーの背中にくらいつこうとする龍の兵隊をラルフがぶん殴り、龍の兵隊は真っ赤に輝きながら群れの中に飛んでいき爆発する。

「弓！みつかりましたか！？！」

カリスを先頭に、マリアとギリ、そしてグリフォードと弓の順番で走りぬけ、弓は首を横に振る。

「よく見えません、空高く飛び上がれば！」

「乗りますかー！」

ヒロエが上から声を掛ける。

「お願いします！」

弓は飛び上がりながら手を伸ばし、ヒロエは弓の手を掴んで漆黒の飛竜に引き上げ空高く上昇する。

「見えますか？」

ヒロエは振り向いて弓は首を横に振る。

「ヒロエさん、スミマセンが僕は気を失います…後をお願いします…」

「え？…弓君？…それは…」

「オーバードライブ【千里眼】」

弓の眼が今までに無いほどに見開かれ、高い空から一点に集中する…。

「…見つけた…」

「弓君！？」

弓は飛竜の上に立ち上がり、二本の刀を引き抜いて真ん中に合わせ、矢包から矢を引き抜き、弓に乗せて弦を引く。

「聖騎士団に報告…前方30キロ…メイド服に金髪の少女…」

弓は少女に狙いを定め。

「当たれ！」

【バシャン！！】クロスファイバー金属が大きくしなり緊張したワイヤーが矢を押し出す。押し出された矢は真っ直ぐに少女へと迫る。

【ドズン！】

少女の身体を衝撃が突き抜け、同時に少女は太ももから暑い熱が燃え上がる。

『い…いたい！』

そして少女は見る。自分の太ももに突き刺さった一本の矢を。

「当たった…」

弓は同時に集中力を使い果たして崩れ落ち、ヒロエが片手で弓を捕まえ落ちないように後ろに乗せる。

「いい子ですね…本当…」

ヒロエは眠る弓を見つめて僅かに微笑み。

「30キロ先！！、メイド服の女！足に矢傷！！」

「聞いたかカリス！！」

カリスはマリアに目を向ける。

「マリア！加速化の魔法だ！！」

「わかってます！！【テンションアップ】！」

マリアの手から銀色の輝きが4人のスピードをあげ、4人は瞬きす

ら追いつかないスピードで龍の兵隊達の間をくぐり抜けそして向かって行く。

「いた!!」

マリアが肉眼で少女を捕える。少女は花畑の中で正座し、目を閉じていた。その周りには龍の兵隊達が次々と搬出されていた。

「マリア、ギリ、カリス!! 一氣に決めるぞ!!!」

「「了解」」

グリフォードは剣を引き抜いて剣を撫でる。

「【我が身を剣となせ…】」

グリフォードの身体から青い光を放つ。

「【SOD】」

カリスは白銀に輝き、槍に輝きを纏う。

「いけえ!! グリフォード!! 【グン!! グニル!!!】」

カリスは白銀の槍を少女に向かって投げ飛ばし、グリフォードはそれに飛び乗りながら道行く兵隊を薙はらい飛んでいく。グリフォードの周りに兵隊が殺到する。

「邪魔はさせん!! 奥義! 【刀神囁雨】!!!」

ギリが飛び上がり、斬撃の雨を降りそがせて龍の兵隊達を斬り倒し、マリアはグリフォードの剣に指を差す。

【称えよ！謳えよ！神々の力を授けさせ給え！！！！パワーフォース！！！！】

マリアの指先から赤い光が放たれ、グリフォードの剣が真っ赤に光り輝きながら飛んでいく。

「おおおおおおお！！！」

猛るグリフォード、流星の少女も目を開き、慌てて両手を前へかざし、現れたのは巨大な龍カリスの槍は龍を貫き、グリフォードはその間にも少女に迫る。しかし少女は笑う。

「グリフォード！！下！！！！」

グリフォードの死角にいた伏せていた龍の兵士たちが一斉に槍を伸ばす。

「構わん！！そのまま行け！！！！」

グリフォードの足もとから影がグリフォードをはねあげ、槍は影により持ち主の龍を貫かれる。

「はーハッハッハッハ！！！！仮面ボルドー！！！！参上！！！！」

『う……うそお！！！！』

「ああああ!!!!」

【斬】グリフォードの一撃は、ミウを頭から真っ二つに切り裂き、ミウの身体は青いヒカリに吞まれて消えてゆく。

『そんな…くやしいよ…』

消えゆくミウの最期の言葉だった、同時に龍の兵隊達が青いヒカリに変わり、空へと登り消えてゆく。

『みんな…死んだ…』

『安心しろ…ゼエ…おまえもすぐ…ゼエ…送ってやる』

「ええ…ハア…五人仲良く…ハア…さっさと封印されちゃいなさい…」

フリルとゼリムは息を上げていた。今までの間、フリルとゼリムは二対一にも関わらず、サレに苦戦していた。

『構わない…僕…一人で充分だ…』

サレは無表情のまま両手を開き、足元から魔力が沸き上がる。

『マリア…否…わたしよりも…だと?…なんなんだこいつは…』

『知らない…僕は…僕だ…君達と同じ…なんら変わりはないよ…』

そしてサレは広げた右手をフリルに、左手をゼリムに向ける。

【ブシャン！】吐き出される破滅の光が瞬く間に二人へ襲い掛かる。フリルもゼリムも光を避けながら身体を低く駆け抜けて一気に迫る。

『うりゃああ！』

ゼリムはサレの胸元に下から爪を振り上げる。

『ん…』

サレは滑るように後ろに下がりゼリムの胸元に手を当てる。

【ズウン！】

『ぐわあ！』

ゼリムの体を衝撃が突き抜け、大きく跳ねとばされる。

【ドゴオ！！】しかしサレの顔面にもフリルの回し蹴りが突き刺さり、サレの身体は頭から地面に倒される。

『う！…』

サレは地面に後頭部をうちつけながらもフリルに右手をかざす。

【ドゴオ！】

しかしフリルには何もない。それどころかフリルの足がサレの顔面を蹴つとばして叩き上げ、右腕を振るえばサレの胸は斜めに切り裂かれ、血を吹く。

『ぐ！…う！！』

「おおおおお！！！！！！」

フリルが吠え、左手を振るう。

【バシヤッ！！】

サレの腹が切り裂かれ、サレは無言で苦痛に顔を歪める。

『ばか…な…』

そしてサレの体は、フリルの手刀に切り裂かれ、青い光になって消え、そして魔法使い達の術式が完成する。

巨大な龍の身体を、魔力の結晶が多い隠し、そして…。

「勝った？…」

兵士の一人が呟いた。

「勝った！！」

「勝ったあ！！！！」

「勝ったんだー！！！！！！」

そこら中で爆発が起きて声のはりあがる。ゲノム王国は種族の壁を越え、勝利に酔い痴れた。国へ帰って来た聖騎士団を、国民達は喚声で迎えてくれた。

「あれ？」

そんな中、フリルが辺りを見回す。

「どうしました？隊長」

グリフォードが振り返り、隊長であるフリルを見下ろす。フリルはそわそわとしながら。

「あたし、ちょっと抜けるね！」

フリルは一人走って人混みの中に消えて行った。

「どうしたんだ？隊長…」

ラルフや聖騎士団員達は首を傾げるなか、マリアは一人、暗い表情になる。

何故だかは分からない。フリルは急にファイフが気になった。そしてファイフの居場所まで、彼女は迷わなかった。

「……」

フリルは独房の古びた門を開くと、ファイフはそこにいた。時刻は夕暮れ時、裏門の石畳はこの上無いほどに美しい朱色に染まる、ファイフの隣にはエリオールがファイフに寄りかかるようにして眠っていた。

「エリオール様は裏門が稀に見せるこの景色が好きでした…」

フィフはフリルに向かって囁くように呟いた。

フリルはエリオールを見つめ、目を伏せる。

「…そう」

フィフはフリルを見上げる。

「この国を頼む…エリオール様らしい最期の一言でした…」

フィフはエリオールからもらった指輪を取出し、それを薬指にはめる。しかし指輪は遥かに大きくスカスカで、フリルはそんなフィフの姿をみて苦笑した。

「指輪のサイズ位図ってから渡しなさいよ…」

小さく呟き、フィフはわからず首を傾げて目を丸くしていた。

この後…フリル達はこの戦いで命を落とした数多くの兵士達を吊った。きっと彼ならばそれを望んであろうと思い、あえてエリオールも兵士たちと一緒に葬儀を執り行い、その際にフィフはこっそりとエリオールの遺品を小屋に持ち帰った。世継ぎのいなくなったゲノム王国は実質国とは認められないため、外交上の問題も踏まえて一応は国王を選ぶこととなった。そしてゲノム王国の財政を担っていたアルジス・ゲーニルがゲノム国王として即位することとなる。この事が後に大事件に繋がるとは…この時まだ誰も予期してはいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8435i/>

【聖騎士団物語第三部】

2010年10月10日07時21分発行